



黒澤翁曲大人著

源氏物語

子鐘房

江戸書林

堂書堂 合刻

玉山堂



Handwritten text in cursive style (sōsho) on the left page, consisting of approximately 15 vertical columns of characters.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines across the page. The characters are highly stylized and interconnected, characteristic of shorthand systems used in the 19th century. The ink is dark and the paper shows signs of age and wear.

細なる所ゆへに、至る六妹、本末通し、皆一人の如く
 見ゆると、多きをば源氏をかきて、物語中、數百人乃
 筆質を一入、まはと細やの、み書かす、始り、終を、長か
 び、聊も、私を、誰の、筆質、被に、被れ、本性、と、おと、一
 費する事、愛子、弄、まを、妙なる物、世より、く、を、手、を
 る、水滸、傳、ま、於、か、ら、れ、如、く、お、き、に、増、て、其、余、の、福、を、ま
 只、ま、と、れ、に、和、洋、の、小、説、物、語、類、の、中、に、は、源、氏、を、う、り、は、く
 道、々、の、お、く、様、を、繼、て、福、を、ま、の、み、を、く、ま、く、妙、不、然、傳
 くと、が、物、なる、事、を、知、べ、し、然、る、を、若、く、は、能、信、傳、と、ま、り
 益、も、き、傷、書、と、傳、お、と、り、て、ま、じ、し、く、し、く、を、お、り、し、
 古、事、を、原、典、の、く、く、に、お、り、し、く、か、る、所、に、眼、を、注、け、し、味、い

又、人、の、お、り、し、く、い、の、ま、だ、う、や

○此物語の他者、紫式部、八、越前守藤原為時、の、娘、を、く、お、南門佐
 宣孝、の、室、と、お、り、く、大、貳、三、位、を、奉、り、く、内、堂、関、白、道、長、公、乃
 北方、倫、子、に、仕、り、て、其、後、一、条、院、の、后、上、東、門、院、に、則、道、長、公、の、法
 娘、なる、を、り、て、又、上、東、門、院、の、女、后、と、お、り、し、く、此、物、語、に、其、程、に
 他、き、る、物、を、し、り、て、藤、原、氏、に、娘、を、れ、ば、藤、式、部、と、い、ふ、べき、に、紫、式、部
 式、部、と、い、ふ、云、る、名、義、に、法、捕、給、后、の、代、名、字、を、所、に、紫、式、部、と、い、ふ、
 名、に、説、り、し、一、は、此、物、語、に、中、に、お、り、し、く、其、後、を、い、ふ、其、後、を、い、ふ、故、に、
 名、を、い、ふ、一、は、一、条、院、法、氣、母、の、子、に、上、東、門、院、に、奉、り、し、り、て、
 我、ゆ、り、は、若、く、は、り、れ、に、お、り、し、く、其、後、を、い、ふ、其、後、を、い、ふ、
 名、に、り、武、藏、聖、の、義、之、云、と、い、ふ、子、付、り、若、く、は、説、り、し、り、れ、ど、

物多しと合さず味あべ

○母子學式部公余り妙文を出生する罪より地獄に落ち
 たりゆり厚悦はる法師の輩はりきりて充論を
 子たり母あり水邊にも法に思ふは物語を書き中
 罪をすべき事無みは古抄にも子あり物語乃本意を
 つけ強て儒子引付佛子引付地は辯をたす
 多るるかると大事を古福に物無いありか事
 へはまゆりふ辨を見るべしゆり朱雀院冷泉院
 歴代の天皇の号を其より出生する事いゆり
 大罪ありとや本より唯其号を借るる色は子あり
 殊に冷泉院の母后源氏と密通は亂れるとあり
 あり

五つもあつるまじき事あり思ふべし
 貴端の語は何れなり
 辨時はのる久云と云出る始終はもと
 りとや号より思ふより上云る陸奥の浮説は古
 批判ありともを其序端を古傳して法師は
 ありと云つたる筋にいし出せるより平河
 りと云ひ悪し罪ありと云ふは
 笑ゆは道と我皇國ハ神代より今
 ありも皇統絶せむる地と云ふ天の日嗣
 たりと太古の天皇といへも今上皇帝
 ありと云ふは叶はる理ありと云ふは
 ありと云ふは書いりありと云ふは

一部は太古の遠くも思ひこころれぬ人なりとこそ言はれ文は物
しつるもそなう

○繪の童子子目別安のうらしき人こそはるごとくぬれぬ人なり
おのれぬ人唯陰の任をうた方子物せよとつれを又知入
人の為子甘き一願もつりおと且は此名を源氏百人一首と
しもなる子に甘き百廿二人の歌はるまきまてへいぬれ
やぬれぬ人唯おほきおほき源氏の歌も小倉百人一首
のぬき物ぞどりやとを晴子別安のうたはる人こそはるごとく
何やと思ひ人の為子量るこそつりあはる物ぞの

源氏は夫の所父帝あり
葵の巻小朱雀院の法位を
ゆづりあひ柿の巻小崩所
あはれ歌は源氏の元後の折
ころはひ世の古屋ふよみてあへ
るまへ源氏を以て大屋の娘葵
の上は聲ひはるまへしき
あへる人おほき元後の時乃
数もよみは種する系もてゆふ
星をさつりあひひつりあへる
とさぬくかひは絶ゆる子とも
のちまきち絶ゆるを今乃え
ゆひふも思ひつる人こそは
何やと大屋の心をうつりさせ
あへる人おほき元後の時乃
また回し種する

相壺帝

初めは

初めは

ゆい

あまの

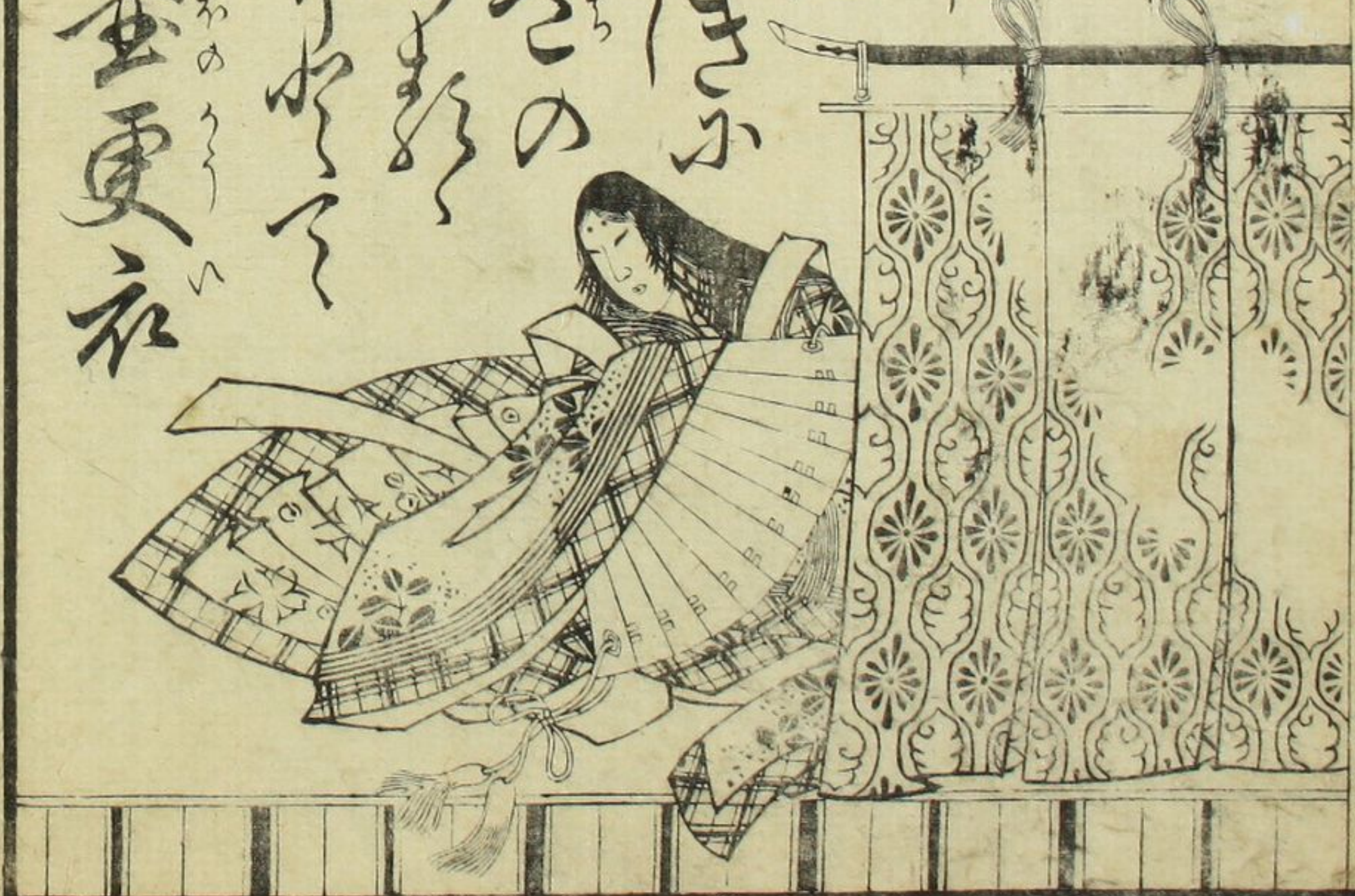
契る

むらさか



桐壺の帝は御世に御孫の
御母あり相つたて奉りて
は歌の病ありて里入りの
てんとはる時めよめる心
今ハ世乃限りとて帝に
別道なり出てゆく道の
悲しきにいとまきそやま
まの命ぞとて生ませ
し行きたりとて

命は
きか
あ
は
あ
さ
さ
か
ま
相
壺
更
衣



桐壺の女房は
相壺乃平なむ後その
里へ帝は侍は行て御ん
とて時御座の虫乃音を
つくよめる之ハ虫は
衣は限りを時は
程なきを衣は
泪のこぼるるの
虫は
あみごと

御負命婦
於虫乃
こ志社
かま
は
長き衣
あみごと



按大納言の女の方にて相
毒のそとの母なるは既に
上の鞠原の命婦のそり
ぬくものといふたはたか
くははちかお命婦に
居使とてははたしつて
涙をそへてつとつては
せしへるもの昇殿の人を
女にうぢせをけしよの
浅ぢ大信子のつとをけ
る所よりぬく

更衣母
虫の音
あまき
何さぢ
あまき
あまき
雲はく人

ちめ大臣のつとつては
せしへるもの昇殿の人を
女にうぢせをけしよの
浅ぢ大信子のつとをけ
る所よりぬく

引入大臣
むきび
あまき
あまき
あまき
あまき

相重者此の御子孫の相重なり
 又なるは清を七まて源氏の姓を
 むり十二まてえ抜くは常事の本
 甚小近衛の中おる任り多心を始
 りて道に教ある位を授け
 せしめし事おそくはたはるる友の
 重なるの事おと上上宮の御位お
 をびへて六条の院と軍の御位お
 へ給のりて思ひるるお別れお
 よみあへるまゝに女おつれおこし
 甘恨をいたひおそそめおはるる
 取以ておとす時は来ぬるとお
 のちおろおしおらんておはへお
 難をそへておはれおらんおはる
 き目はおはるおとひもておはる
 けほの事おはる

光源氏君
 侍道
 みる
 おも
 志せ
 水あは
 おはる
 のしん



Illustration of a woman in traditional Japanese court attire (kimono) sitting on the floor. She is wearing a patterned kimono with circular motifs. Her hair is styled in a traditional manner. The illustration is in a simple line-art style.

源氏御表は物語のやとみ
 女はお言めは侍に
 くとお歌物おとみせぬ女を
 うとみせ給ふせんは侍お
 女抱ては侍おとみせぬ
 を憤て別て去る時はよらん
 ちうとん侍を折て是を
 うおはるおとみせぬ
 はたおかりははたおかりは
 けほの事おはる

左馬頭
 手て
 何わ
 出を
 かお
 られ
 夫の



Illustration of a man in traditional Japanese court attire (kimono) sitting on the floor. He is wearing a patterned kimono with floral motifs. He has a traditional hairstyle. The illustration is in a simple line-art style.

左ののびの指をさしひきた
る女より別上の路は通し
んを先をさるのさぬの
まのしを我心をさるさ
つひうまて路は通し
別るべき折れんさ
そやさう君の心を別る
君もほふふ別るさ
こゆゑにさる物さ
ひまのさるさるのさるさ
いひ倍もさるさるさる

わのま
わの手を
さる君の
まのさ
かお入
ひさる
さるを
指喰女



左ののびの指をさしひきた
る女より別上の路は通し
んを先をさるのさぬの
まのしを我心をさるさ
つひうまて路は通し
別るべき折れんさ
そやさう君の心を別る
君もほふふ別るさ
こゆゑにさる物さ
ひまのさるさるのさるさ
いひ倍もさるさるさる

ことねのえん
琴音殿上人
月崇
えあ
らぬ
若あ
はま
とん



要ひきたる女を、別上り所
 上人への送し上の終は女の
 終人をもりけりけりけりけり
 るとはは、又其殿上人を信
 道あるものに云ねせるやう
 心よそ吹風を心と合せの
 笛もれ我の引るもむき云
 古きと今十月まれば本
 枯しといひ云を要をさへ

本枯女
 こころ
 吹あみ
 先
 笛もれが
 むき
 こころむき
 こころのさもか



源氏物語の物語
 あまのむすめは、如く一人也
 は歌ある傷者の如くもむき
 てけり新に風病を藤を
 吹るれ今おは口はははを
 けりてきたるへりやを
 深語を述べるが女は、
 うとほ、
 る人、
 今おは、
 里の、
 有る、
 わる、
 素へ、
 う藤、
 を信、

藤式部
 さかみ
 あま
 むき
 たる
 むき
 たる
 たる
 たる



優者の娘もまたあつち上り
顔のほろけ人の意氣も
不才は信やうる中たり
登るるまきんを中は
の恥うききりありむなる
〜あはれおやうりゆきぞ
〜まきんを中は

父のいへる母相重の弟は
始ておぼろけは弟は
〜をえりし次と友位を
〜まきんを中は
〜あはれおやうりゆきぞ
〜まきんを中は

蒜喰女

あまこもの
おを
へそめ
中あま
ひるま
何の備をぬ
〜ま



致仕大臣大臣

我病あり

藤の以り
たそ
〜ま
〜ま
〜ま
〜ま
〜ま



又これの古后母、相堂の弟の妹
 五段は、おはるは、母、相堂、相堂乃
 巻に、源氏の方、成業の巻、少
 志、志を生、後、六、条、法、清、息、所、の、堂
 五、程、を、か、つ、め、は、あ、物、の、け、ま
 ろ、み、な、を、源、氏、ら、ひ、あ、ま、を
 め、あ、る、時、は、は、い、よ、み、る、に、ま、い
 陸、息、所、の、心、を、その、魂、の、入、り、い、せ、こ
 る、心、物、思、ひ、も、心、を、い、け、け、し、出
 る、魂、を、志、の、衣、の、下、に、合、結、所、に
 む、ま、び、ご、い、た、く、な、る、心、を、い、け、け、し、出
 魂、は、か、ま、せ、し、る、を、い、け、け、し、出
 を、む、ま、び、ご、い、た、く、な、る、心、を、い、け、け、し、出
 お、よ、り、く、よ、め、る、お、い、下、の、ひ、ち
 衣、は、あ、を、合、結、所、に、あ、り、け、け、し、出
 つ、う、ひ、ら、ひ、こ



葵上
 新
 日
 空
 う
 我
 む
 した
 づ

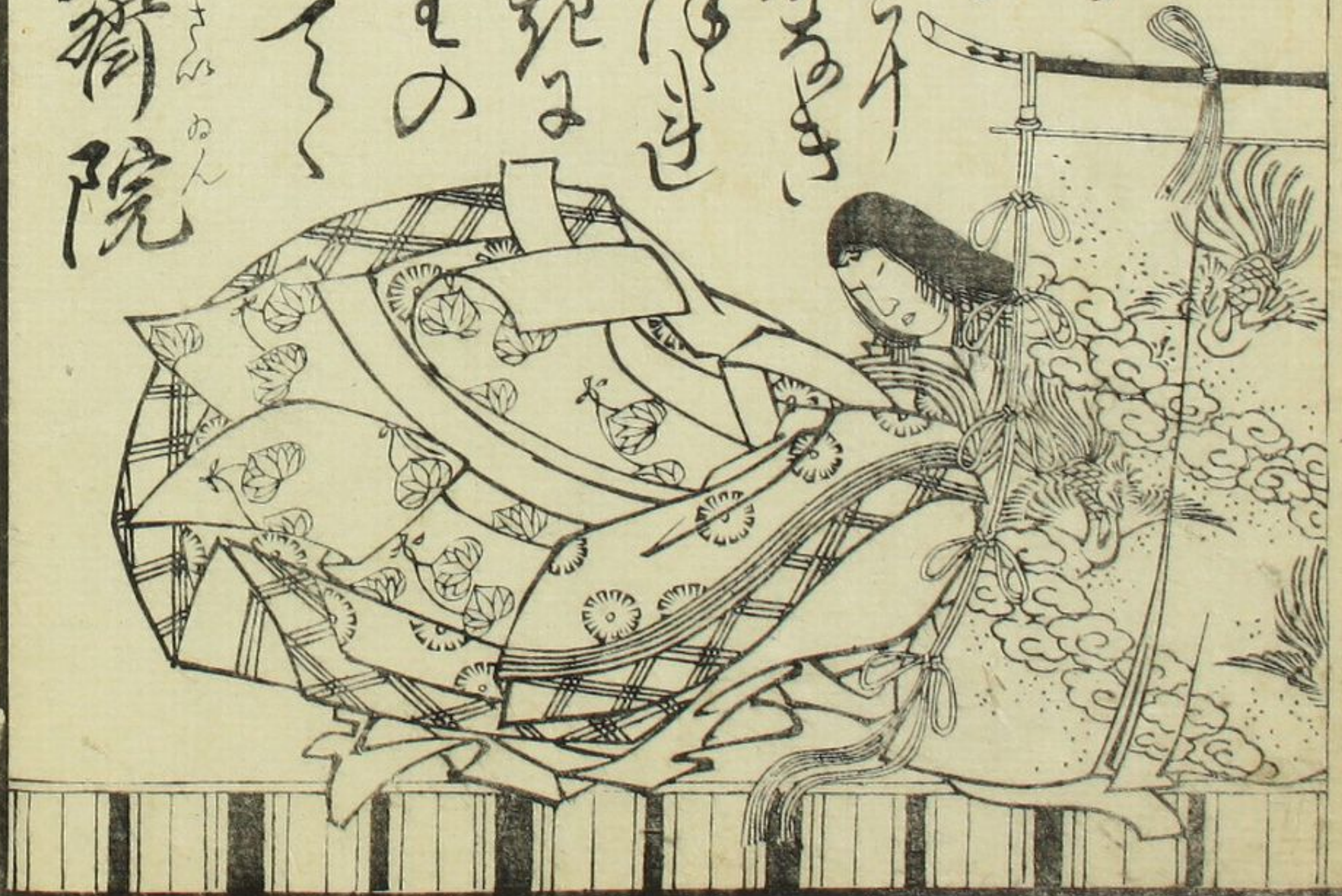
相堂の三弟は、法、清、の、上、の、
 法、母、子、で、源、氏、の、法、母、の、大、法、
 せ、あ、り、て、後、は、法、母、か、つ、め、
 茶、室、茶、の、も、親、子、か、つ、め、
 大、室、と、い、ふ、を、見、て、は、あ、の、葵
 の、上、に、せ、て、法、母、の、法、母、の、
 源、氏、来、あ、り、て、○、法、母、の、
 今、を、改、め、も、衣、を、か、つ、め、
 法、母、の、心、を、その、魂、の、入、り、い、せ、
 る、心、物、思、ひ、も、心、を、い、け、け、し、出
 も、は、を、法、母、の、心、を、い、け、け、し、出
 い、つ、く、な、る、心、を、い、け、け、し、出



ひま
 引
 何
 年
 有
 有
 人
 有
 有
 有

桐葉の帝は清分挑園式
 の言は信むまめま源氏
 屋外とち林亭とて空茂乃
 富原と成る屋をそはま
 敷をわらしめ源氏まん
 をびまててやみへは
 を源氏〇み折の意は
 まぬ権のまはせま
 らんをよみておろるる
 らん秋色るはま
 権のるるのまのふらひ
 れるを我方になへ
 手教いまのれのみを又
 ちまこかへん人料まへ
 あり

がは
 阿き
 うつる
 あるか
 むま
 まの
 まるの
 秋を
 権齋院



中絶云の源伊孫の北方源
 氏はつれあつては色之
 子まぬかえん屋
 氏空庭は信あまは
 源氏の思ひるる秋を
 適去をも信源氏〇
 のを替へるるは
 がは信つてはこれ
 まつる時を信
 る時を信
 ちまへん
 ちまへん
 らんをよみておろるる
 らん秋色るはま
 権のるるのまのふらひ
 れるを我方になへ
 手教いまのれのみを又
 ちまこかへん人料まへ
 あり

空蟬尼
 うつま
 羽ま
 香の
 こが
 志の
 ぬま
 の



伊勢の娘はくさくさのまう子
之後子藏人の娘の坊方とある
おのゝ保氏一和重のひう後
○ほはつりも斎場の萩を
むはむはひききかたを何
まゝすゝゝと舟つかりうり
るはくゝゝとやうにわのん
うゝゝと保女中付ゝ一和重
後重のゝゝひひとむつる意
まゝ心まゆゝゝゝのむす
がれゝゝゝのひひとゝゝゝ
萩の下折は風子とゝゝゝ
おのゝ保氏一和重のひう後



軒端萩天

月の光

下萩乃

東萩

むはむはひききかたを何
まゝすゝゝと舟つかりうり
るはくゝゝとやうにわのん
うゝゝと保女中付ゝ一和重
後重のゝゝひひとむつる意
まゝ心まゆゝゝゝのむす
がれゝゝゝのひひとゝゝゝ
萩の下折は風子とゝゝゝ
おのゝ保氏一和重のひう後

三位中納言の娘はくさくさのまう子
之後子藏人の娘の坊方とある
おのゝ保氏一和重のひう後
○ほはつりも斎場の萩を
むはむはひききかたを何
まゝすゝゝと舟つかりうり
るはくゝゝとやうにわのん
うゝゝと保女中付ゝ一和重
後重のゝゝひひとむつる意
まゝ心まゆゝゝゝのむす
がれゝゝゝのひひとゝゝゝ
萩の下折は風子とゝゝゝ
おのゝ保氏一和重のひう後



夕顔上

山のむら

ゆら月

おら

たえ

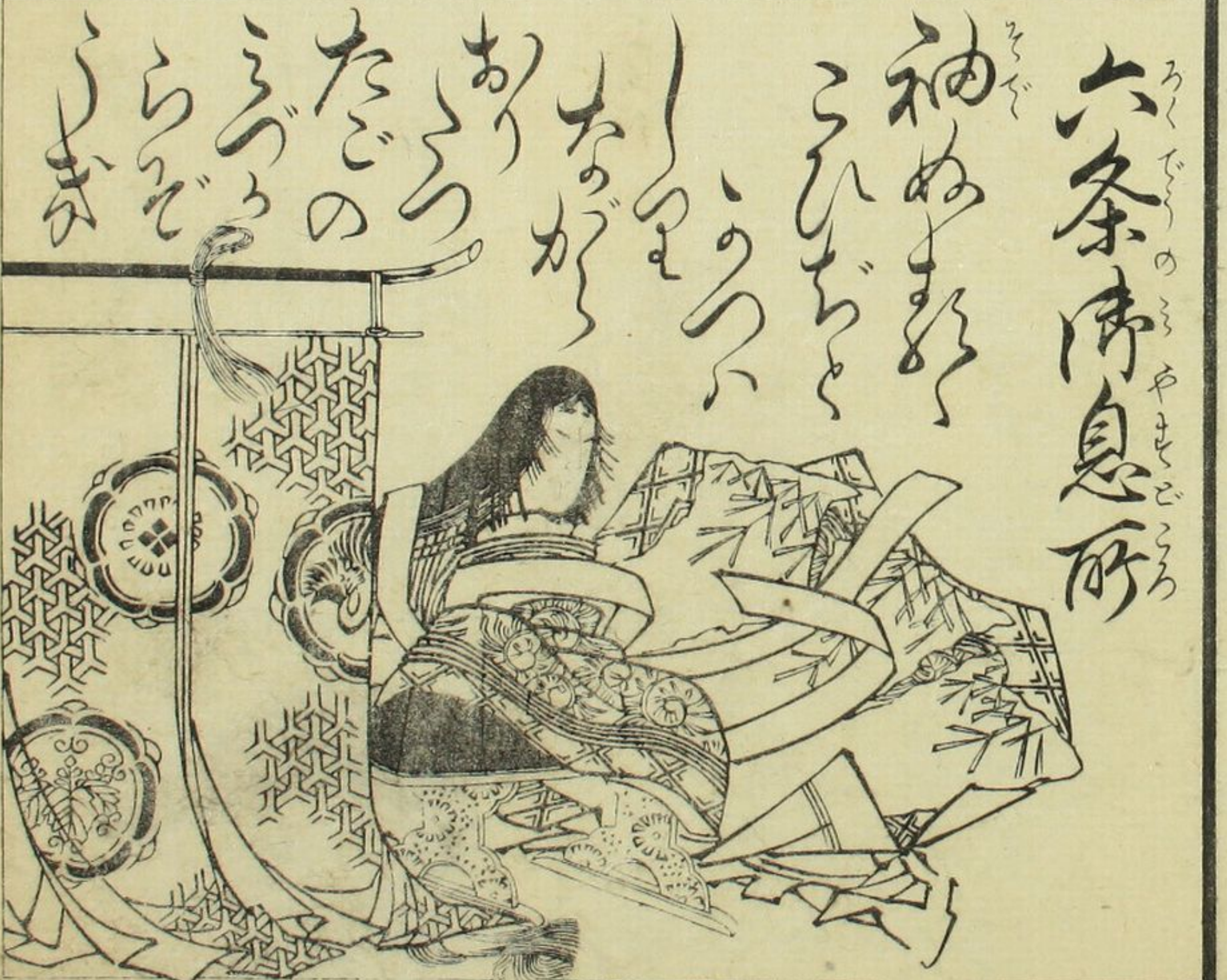
おま

夕顔の上は五條の君も侍る
女房の原氏侍は別れに侍る
夕顔の心を折さるる時
庭もあつてさるる時
夕顔の内は夕顔を折きて
おは面目を原氏へ推
けしに光原氏の君も侍
推さるる面目を原氏へ
侍るる



夕顔の上は五條の君も侍る
女房の原氏侍は別れに侍る
夕顔の心を折さるる時
庭もあつてさるる時
夕顔の内は夕顔を折きて
おは面目を原氏へ推
けしに光原氏の君も侍
推さるる面目を原氏へ
侍るる

夕顔の上は五條の君も侍る
女房の原氏侍は別れに侍る
夕顔の心を折さるる時
庭もあつてさるる時
夕顔の内は夕顔を折きて
おは面目を原氏へ推
けしに光原氏の君も侍
推さるる面目を原氏へ
侍るる



夕顔の上は五條の君も侍る
女房の原氏侍は別れに侍る
夕顔の心を折さるる時
庭もあつてさるる時
夕顔の内は夕顔を折きて
おは面目を原氏へ推
けしに光原氏の君も侍
推さるる面目を原氏へ
侍るる


源氏の権柄をわたりたる
聖人の上なるト時小源氏の
法益をたまたりてある事
この山侍の宮のあふ出
る事あるに聖人乃たま
聖人の法をふ出ていざ見え
らぬ法を法をたまたりたる
とのんをたまたりていざ見え
るの法を法をたまたりたる
と

何某寺聖人
真山あり
松の
水原
おを
まを
まを
あけ
まを
かを
るる

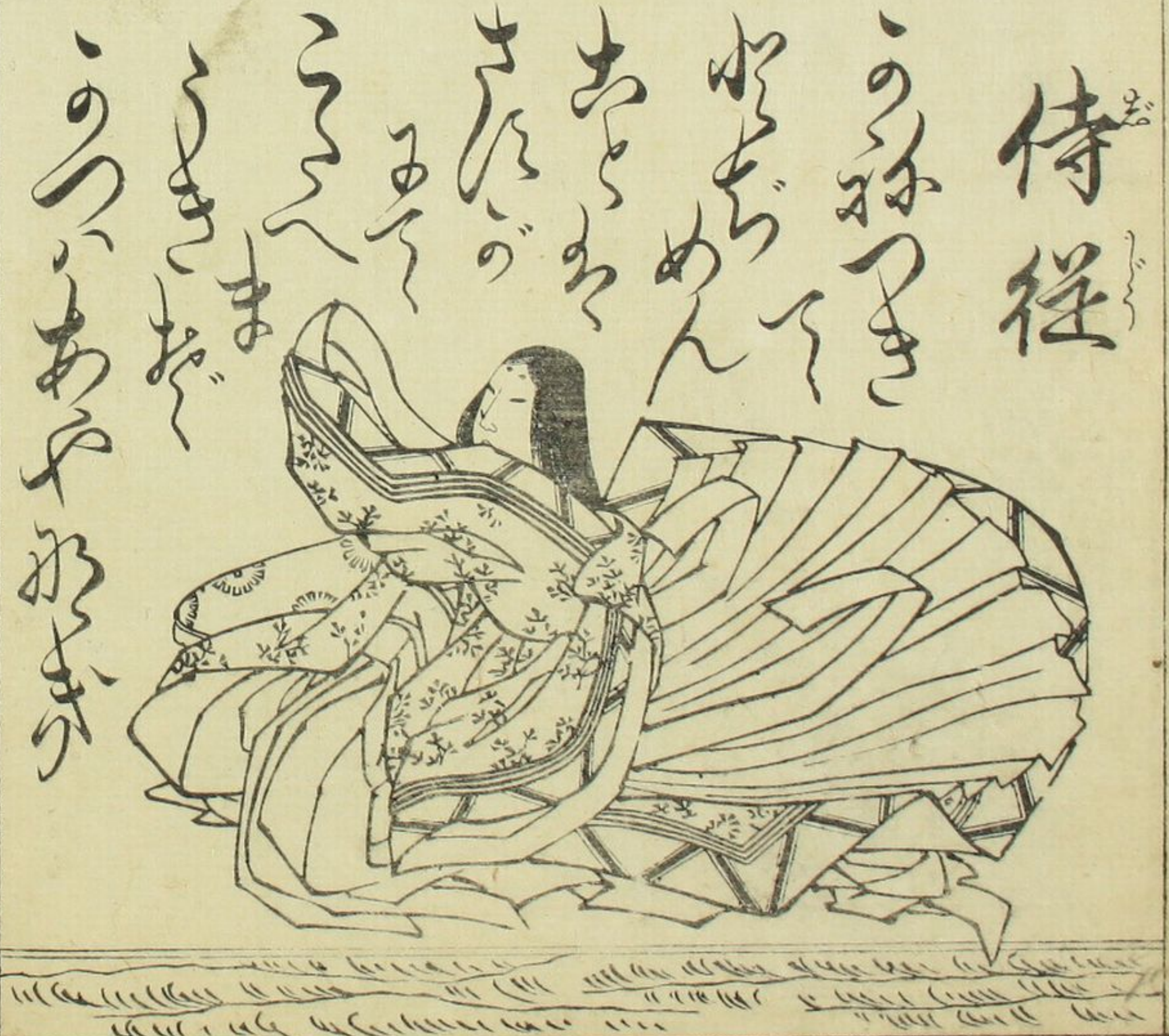


武都の宮は法を母を梅を
大納言はわらわの精を母
おの祖母の尼やあは
ておの祖母の尼やあは
らぬ法を法をたまたりたる
六条院の教をたまたりたる
氏の思ひの才を母の才を
はたす月を餅を餅を
源氏〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
みま母子のりおを教を
るるるるるるるるるるる
の池水は鏡のやわらわを
のひやわらわを教を
かみえるるるるるるる
よそへてははははははは

紫上
池の鏡
万代を
任を
るる
あえ
る



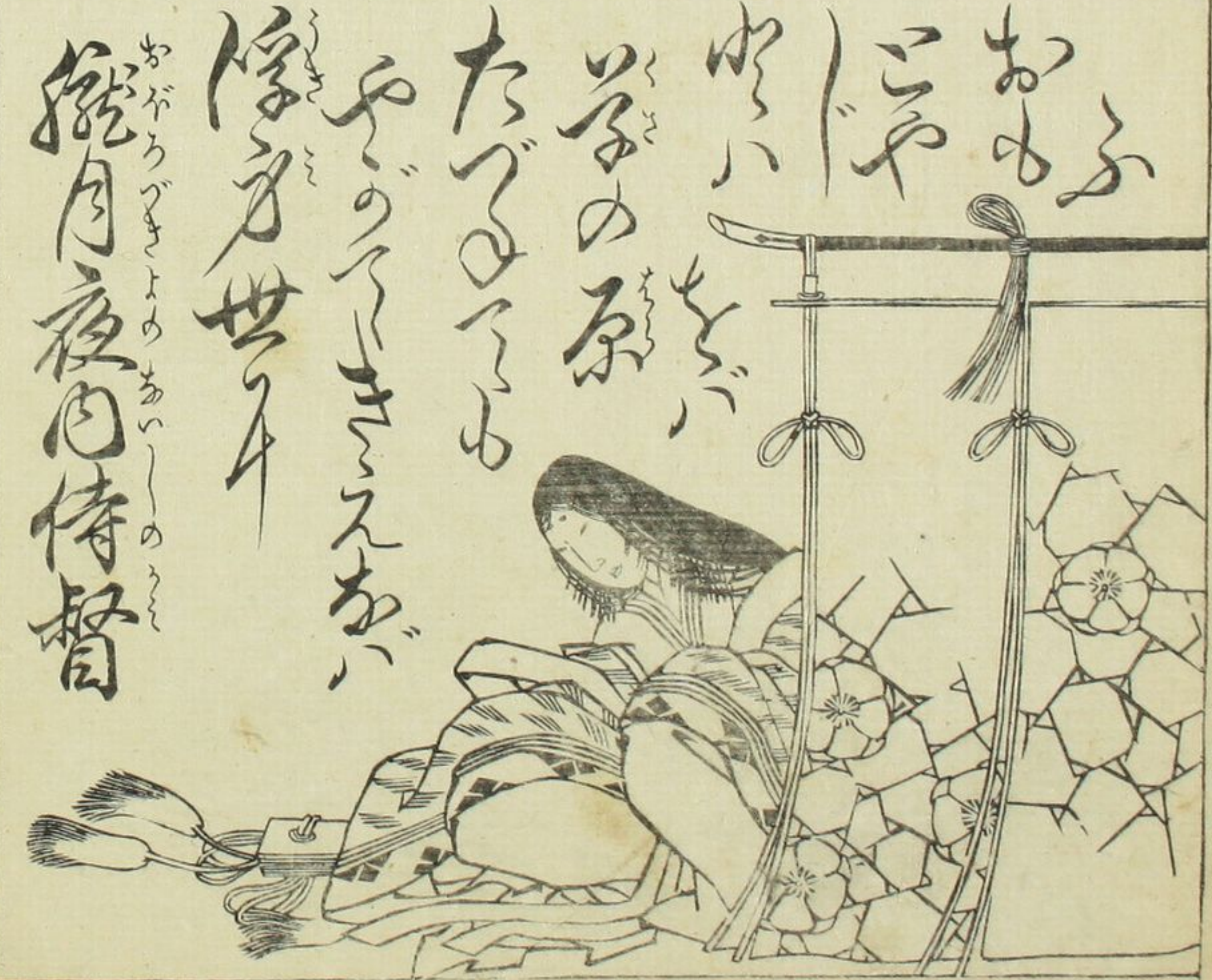
末摘花の女房ははつと源氏
 止まつむるに通りそめあひて
 ○いそそび思ふまゝまたま
 めん物をひききこいしあふ
 らふと海へ入る時末摘花
 替りて思ふまゝとて心も
 以て人をせはるやみまふ
 さげふ思ひまゝらび又ほ
 ち申すふらうまゝ我を
 らもいふもあつて思ひま
 らいとまを子のまゝま
 へ替りて思ふまゝは
 かへいふ



末摘花の女房ははつと源氏
 止まつむるに通りそめあひて
 ○いそそび思ふまゝまたま
 めん物をひききこいしあふ
 らふと海へ入る時末摘花
 替りて思ふまゝとて心も
 以て人をせはるやみまふ
 さげふ思ひまゝらび又ほ
 ち申すふらうまゝ我を
 らもいふもあつて思ひま
 らいとまを子のまゝま
 へ替りて思ふまゝは
 かへいふ



二条のおかしの御姫さまは
 殿の太后の御妹さまの御孫さま
 朱雀院さまの御孫さま
 殿の御孫さまに内侍の御
 とあるところへ源氏お姫さま
 へへるおは後おつれせんあ
 名のしるしつり一巻に御
 ちりころへ我が方のまゝ死
 て子孫の御孫さまからんあそ
 の子孫の御孫さまからんあそ
 へへるおは後おつれせんあ
 はも持ててんあおひまふ
 うかごめたるん



おふ
 二条
 源氏
 たづね
 浮世
 月夜内侍督


朱雀院の母方は法祖
 月夜内侍の御孫さま
 とあるところへ源氏お姫さま
 へへるおは後おつれせんあ
 はも持ててんあおひまふ
 うかごめたるん



二条右政大臣
 我が
 何の
 買を
 待は

前坊の法原は海に六条の法原
可成葉を空に伊勢の宮を
立賜ひ給合巻を清和院の
女所と女室女を中宮
法皇の白皇太后宮を成給
はるの斎宮と兼て下賜
時子保氏○の御りてまつ
も心づかぬ魚別れの中
こころをいと保ちてなす
法皇一人の神の心すめ
ふみ見通し賜物物ぬ
あふぬあふぬのたまふ
あはれぬの御りてまつ
ふき物どもとて國つ神はまつ
ゆきとての地底のひく

たがや
まがや
みと
等深
中あふ
あふ
國は神さめ
秋好中宮



為すは女流の法皇の御
兵部卿はまて女を式部
に宋路の宮に相蓋の帝か
くれせ給ひて法皇の御
親方へ法皇の御りてまつ
法皇の御りてまつ
樹をそとへ給ひてまつ
枝をそとへ給ひてまつ
目やれとて思ひ給ひてまつ
こころやれとて思ひ給ひてまつ
みゆきとて思ひ給ひてまつ
と也帝は法皇の御りてまつ
親とて思ひ給ひてまつ
の御りてまつを歎きたる
たり

武部御宮
後藤み
たの
松や
枯み
下葉
ちのり
ら



源氏物語の女院の女房のうらやま
氏の法衣のうらやまの則上と
回ト女院に出し給ふ時
源氏〇とえ侍る池の鏡乃
さ平のまたえ別一親をえ
ぞ無きと毎つるま
人の帝がれせむひて女
院の侍も賜ふ侍を
まもる目れぬを岩井の
少人のあせりんを
よせてや

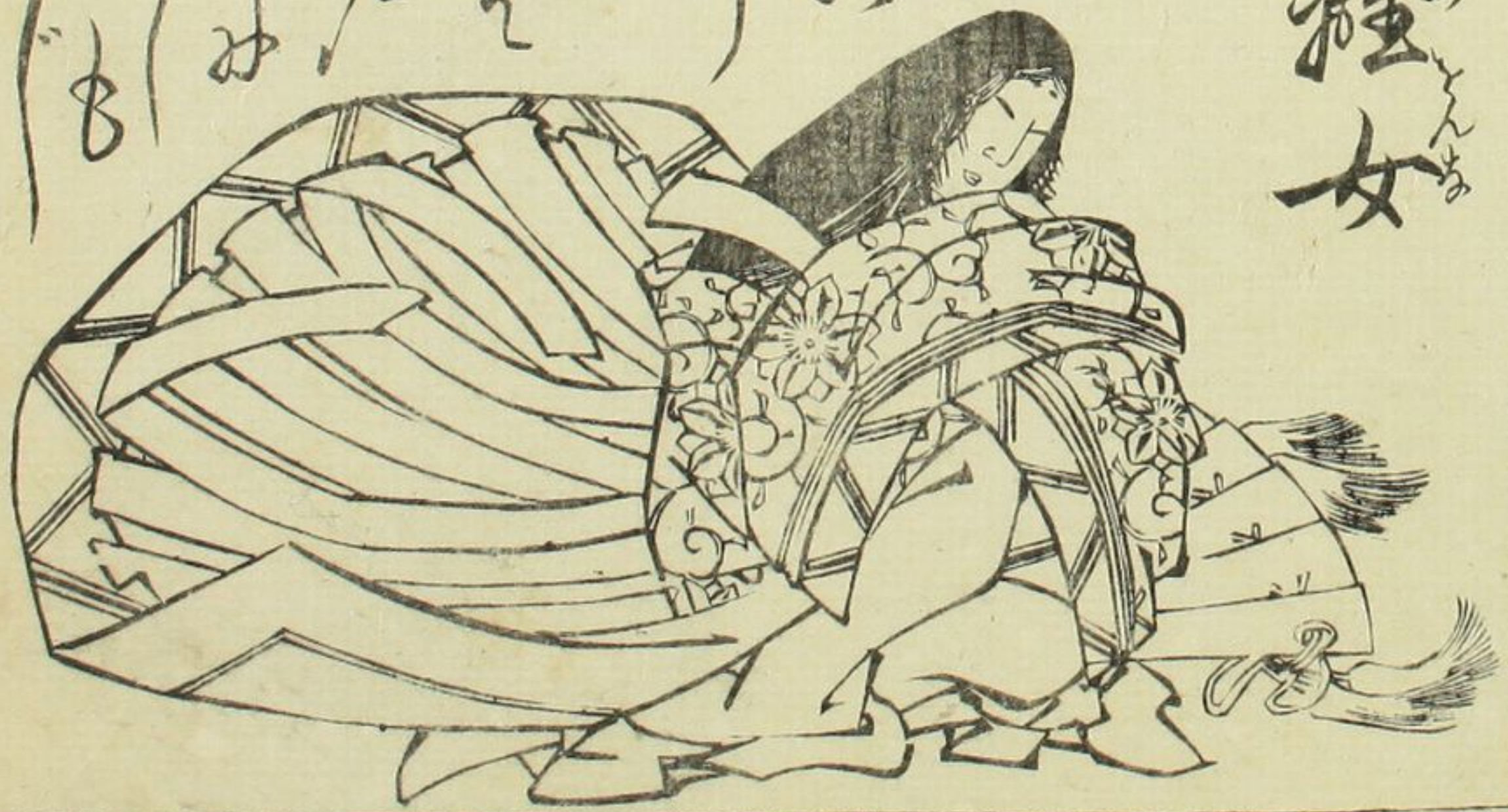
王命婦

少
岩井
あも
人形の
あも
うらやま



源氏物語の女

源氏物語の女
あも
あも
あも
あも
あも
あも
あも
あも
あも
あも

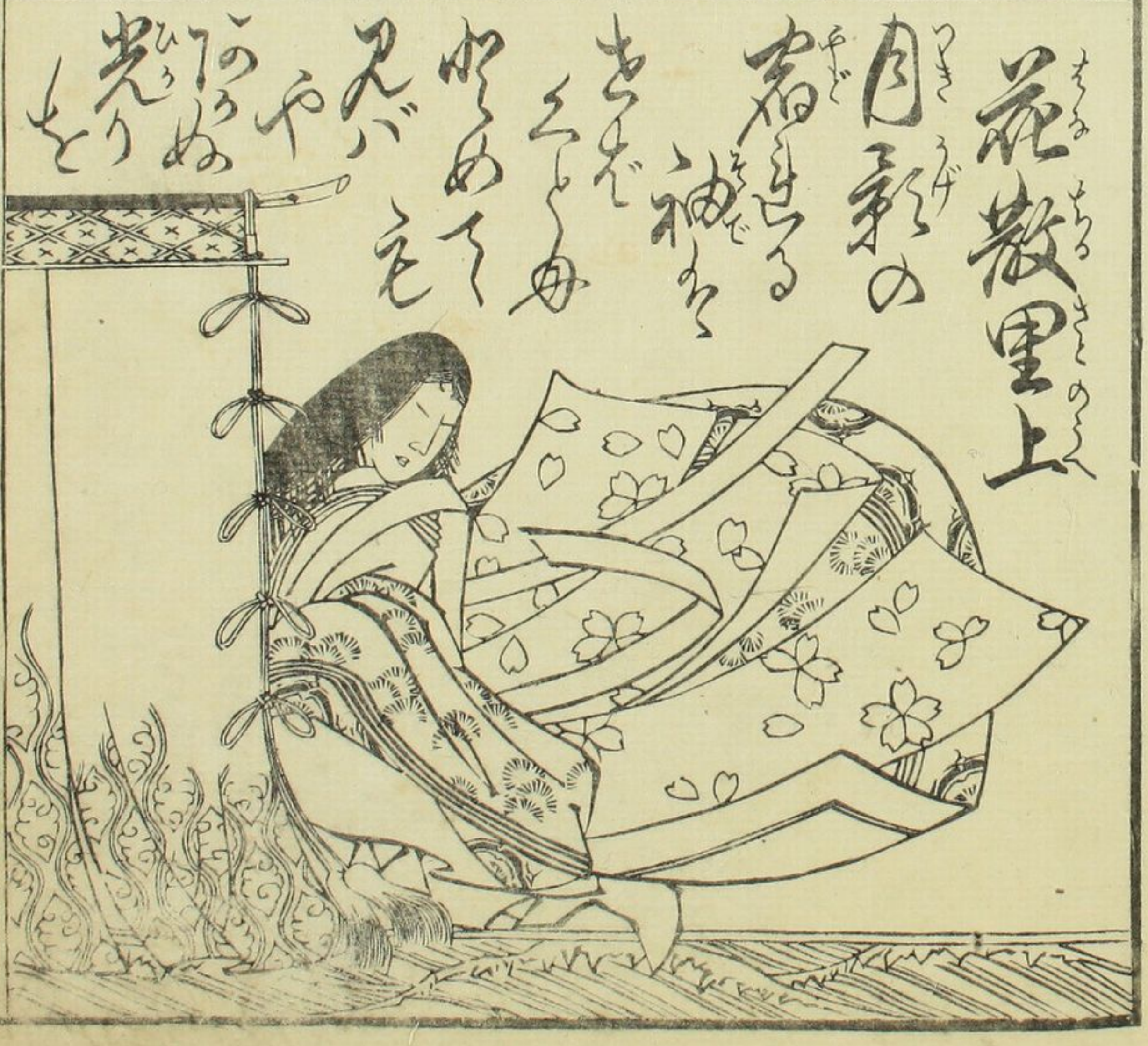


大臣家の御姫相堂の希は
 女御もて世教里の清姫也
 此多相堂の希かよき世
 賜ひて後法をうけ物た
 世に任賜ふるも源氏中
 ひと多ひて○橋の希も
 つりみ時をそれお甲を
 ねてぞとらへて毎病つる
 一と人の目もあく荒を
 一と人の我前へ軒の橋を
 君もとらへて種も六来れ
 一軒の橋を軒はつるも
 いととととととととととと
 せととと



人目かくる世
 たるも橋の
 礼ありか
 つるも軒は
 花散里上

源氏物語の女御の清姫も
 源氏の思ひの後には
 多き世多賜る中は一人の
 清方と多は多の源氏清
 一とらへて種も六来れ
 賜る時多賜るも一人の
 不承るも我前へを教あり
 一とらへて種も六来れ
 別をんをかくるも一人の
 免度別をんをかくるも
 解ふ世も我前は教あり
 一とらへて種も六来れ
 新とらへて種も六来れ



花散里上
 月影の
 若き世
 ちととと
 光りぬ

前播磨守の子と源氏乃
親く百つひうぐの始藏
今よりかゝり賜り明石
巻に少納言とてつらの巻
小鞆負佐藤女巻小右女
と申すは別上多岐
時子よたんとて存存時方
は友子ハ何れもあはれを
名れを考はつるもあはれ
男いやうとてかたつ
お物を連るもて集え
とてあはれ



近衛中納言とて去る播磨守
とてあはれ子入をく明石
浦子信守考く山崎とて
入ぬは源氏乃磨のさ
ら一のをく入るるをく
は耐はせんとのてて答
に承るこゝろをくあはれ
と物思ひのてをてを
とてあはれ子入をく
とてあはれ子入をく
思ひとてあはれ子入
とてあはれ子入をく
とてあはれ子入をく



入る前播磨の娘源氏
仕へる中宮を奉り六条
院に数多は思ひ人居る中
の一人冬の方よりは
源氏嫁つて思ひ居る
ことを語合を人にも
世の多もよまかや
る源一人の言の成り
らぬ人よはづれを
現もかた言ふ



いん
ま
ま
を
づれ
あ
ま
や
げ
明石上


左衛門大夫の娘源氏
源氏一人の父も
心は源氏の子
又世に
心は源氏の子
をよまかや
子よの心を
源氏



五節君
源氏
あ
ま
の
心
を
源氏

相臺は帝の皇子源氏丸
 法才は法母落首の女院と云
 紅糸は法母を生れさせし
 の巻には末宮にまゝと云はる
 小巻は法位ありと云はる
 あの巻に法位を末宮にゆづ
 てありと云はるは法母は源氏桂
 の後まゝ月の表にむかひ
 系は法母の御もてせ
 ると云はるは桂川のありは里か
 れはまゝ月影のまゝの末らんと
 月の中を桂橋と云はるは月
 の桂をまゝと云はるは入るは
 桂のまゝと云はるは桂の
 まゝと云はる

冷泉院
 月桂の
 川
 水
 さ
 大
 桂
 の
 の



源氏桂院はもと源氏丸の時
 子同車はもと源氏丸の時
 同は法母の御もてせし
 慶の浦はもと源氏丸の時
 源氏丸はもと源氏丸の時
 取はもと源氏丸の時
 は法のありはもと源氏丸の時
 まゝはもと源氏丸の時
 源氏丸はもと源氏丸の時
 源氏丸はもと源氏丸の時
 源氏丸はもと源氏丸の時
 源氏丸はもと源氏丸の時

源氏丸
 頭中將
 月桂の
 川
 水
 さ
 大
 桂
 の
 の



源氏丸

二五

父の保氏母の茶の上の茶巻に
 生れて産子巻に元彼文章
 生に補一侍はあつても始
 まるは長官位を經て白雲
 巻に左大臣とあるはあつても
 井原との中をさるれつても
 冬好を最たる程まじり
 小娘もくはあつてもあつても
 けのせつたかさつてあつても
 ある家個うねと時のうきも
 へつひを本るつてもあつても
 へつひを本るつてもあつても
 へつひを本るつてもあつても
 へつひを本るつてもあつても



父の保氏母の茶の上の茶巻に
 生れて産子巻に元彼文章
 生に補一侍はあつても始
 まるは長官位を經て白雲
 巻に左大臣とあるはあつても
 井原との中をさるれつても
 冬好を最たる程まじり
 小娘もくはあつてもあつても
 けのせつたかさつてあつても
 ある家個うねと時のうきも
 へつひを本るつてもあつても
 へつひを本るつてもあつても
 へつひを本るつてもあつても
 へつひを本るつてもあつても



源氏一書

くはり下は四人これ秋好
結女居て成の上は法方の
おん召よまをれ舟にの
きしれ池をたぐりてよあ
るこども心は吹くむの
やに波のたてるおの波
さし梅の葉を新玉を珠の
山あきのいろをえゆるはるや
なまたなる山あきの崎を
らんらん山あきのまきこわ
近江國の地をへり

山吹女房
風あけハ
波の志
以
ら
た
山あきの
乃ま紀



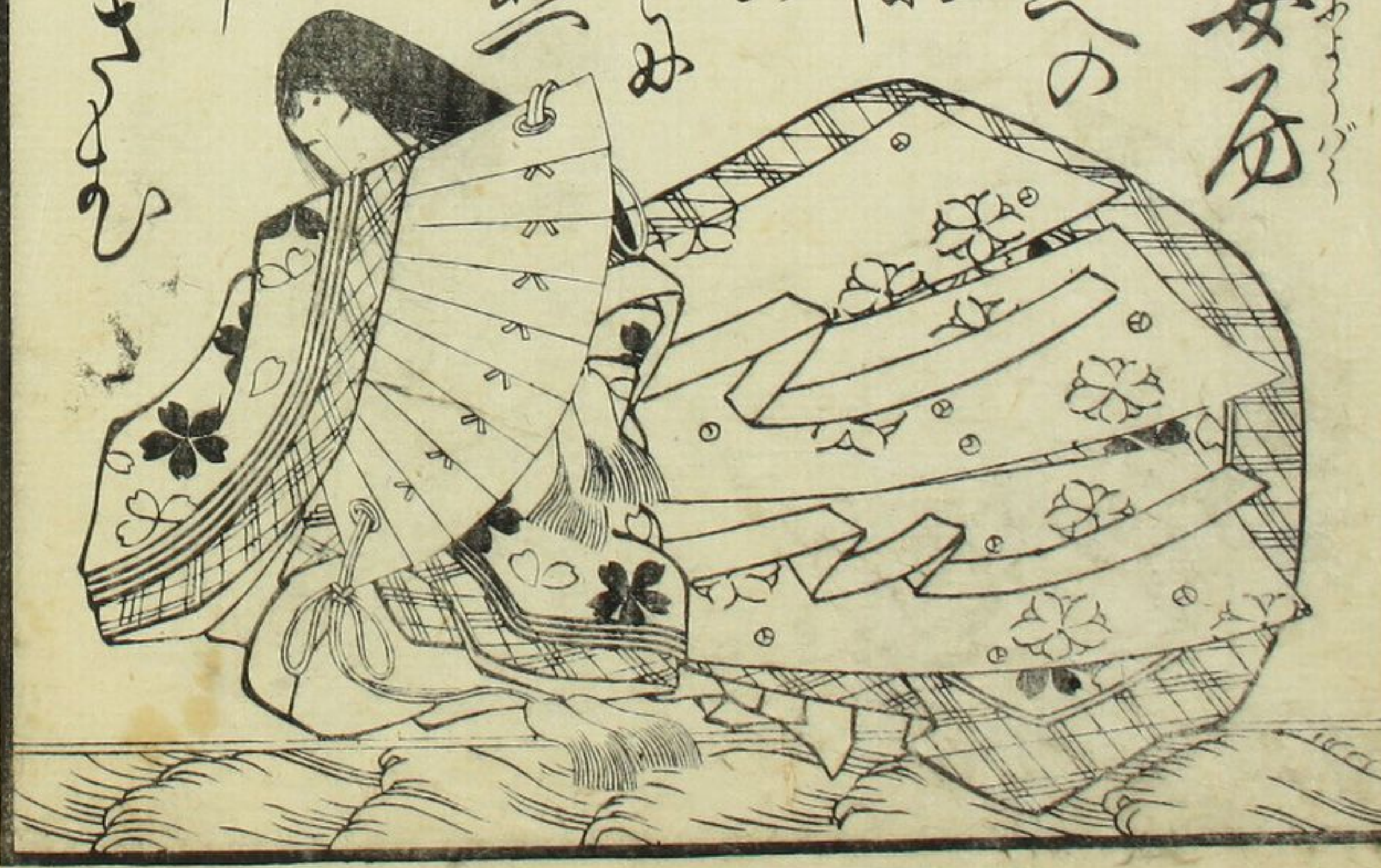
あれもは所をほめてよめる
このは妻はほほは池水ハ
井手は川流子通へるもや
あつらん春の山吹新つづ
く水底まぐもあはるけ
しきほもいしめがとて井手
を山吹の園山吹の名西へ

井手女房
妻の池や
井手は
川流子
あつらん
あつらん
山あきの
おん召よま
白へ



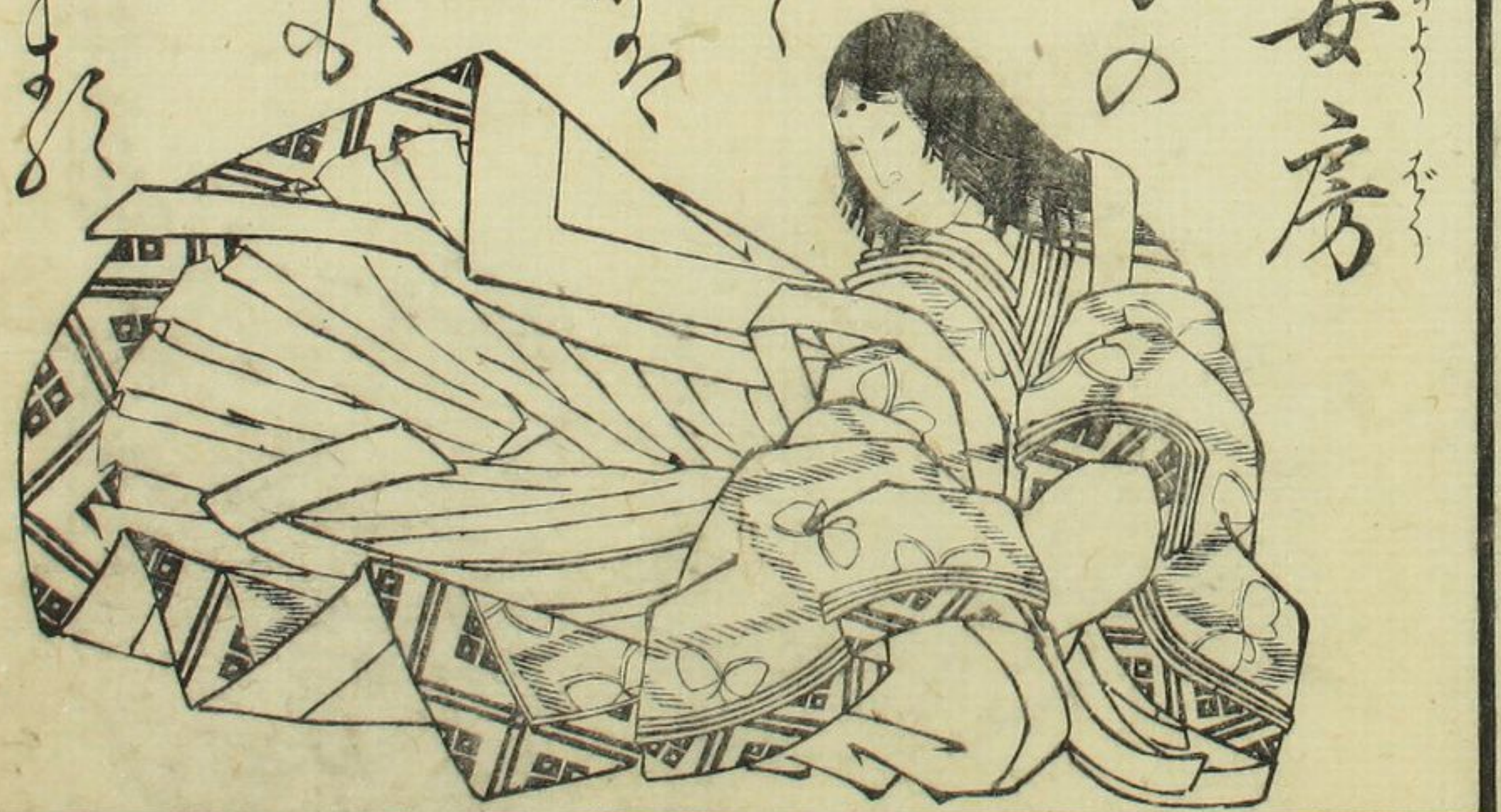
花の上の山々を蓬菜を
以て深き子花の脊に負
て入る子よふくこは蓬菜
花も尋ね求る及むは
はみはくらの面おもむ物
おのひもよきれんものや
らちまはね不老不死
なむの所子けりいれんと
く蓬菜を尋ねる程子
舟の内まき老くといふ
子によふくは母のこころ
老きよりいふ

花の上の人の
かたの人の
おもむね
母の心
老き無
なむを
あり
はこむ



今日のまはれ々もよき
くまのりけりあけり
系さくらのめけき地
子子揃さめられは掉
の常もむは敷や
名えて面を
と持とまきとつ

春日女房
まはれ
花
ちり
は



父の致仕のおもむきを母に承る
かゝるの娘こそ女乃若き
左近少将とてけるを始て
追々昇進し柏木のきよ
檜大納言とてけるを
はつと辞母子女とて
かゝる人必火葬の烟に
行ふをくわくわくし
身も成とも魂は消て
うづらうをまじりて

かゝるのまひんの
柏木右衛門督
申すは
うらやま
うらやま
おのれは
たもた
たもた



父の致仕のおもむきを母に承る
かゝるの娘こそ女乃若き
左近少将とてけるを始て
追々昇進し柏木のきよ
檜大納言とてけるを
はつと辞母子女とて
かゝる人必火葬の烟に
行ふをくわくわくし
身も成とも魂は消て
うづらうをまじりて

かゝるのまひんの
紅梅右大臣
恨めしや
かきみの
くれ
まよひ
まよひ
まよひ



式部卿の言はれぬ御座りては
の上は婦におもひ玉首子
心を移さるるより上りて
いさゝか桂柱を父室の
許子候し給ふ物のけま
人の心へ入る人こそは
字のいふ御座りては
時流は桂柱の上〇今に
てやどるれぬとも別れ
はるるを承けへるは
ころたを桂柱に別れ
おのひ出さるるもさ
子三つとて入る物
ひはるる

さうらび
桂乃
なまこ
水も
たも
何みよ
出も
おのひ
水は
賢黒大臣北方

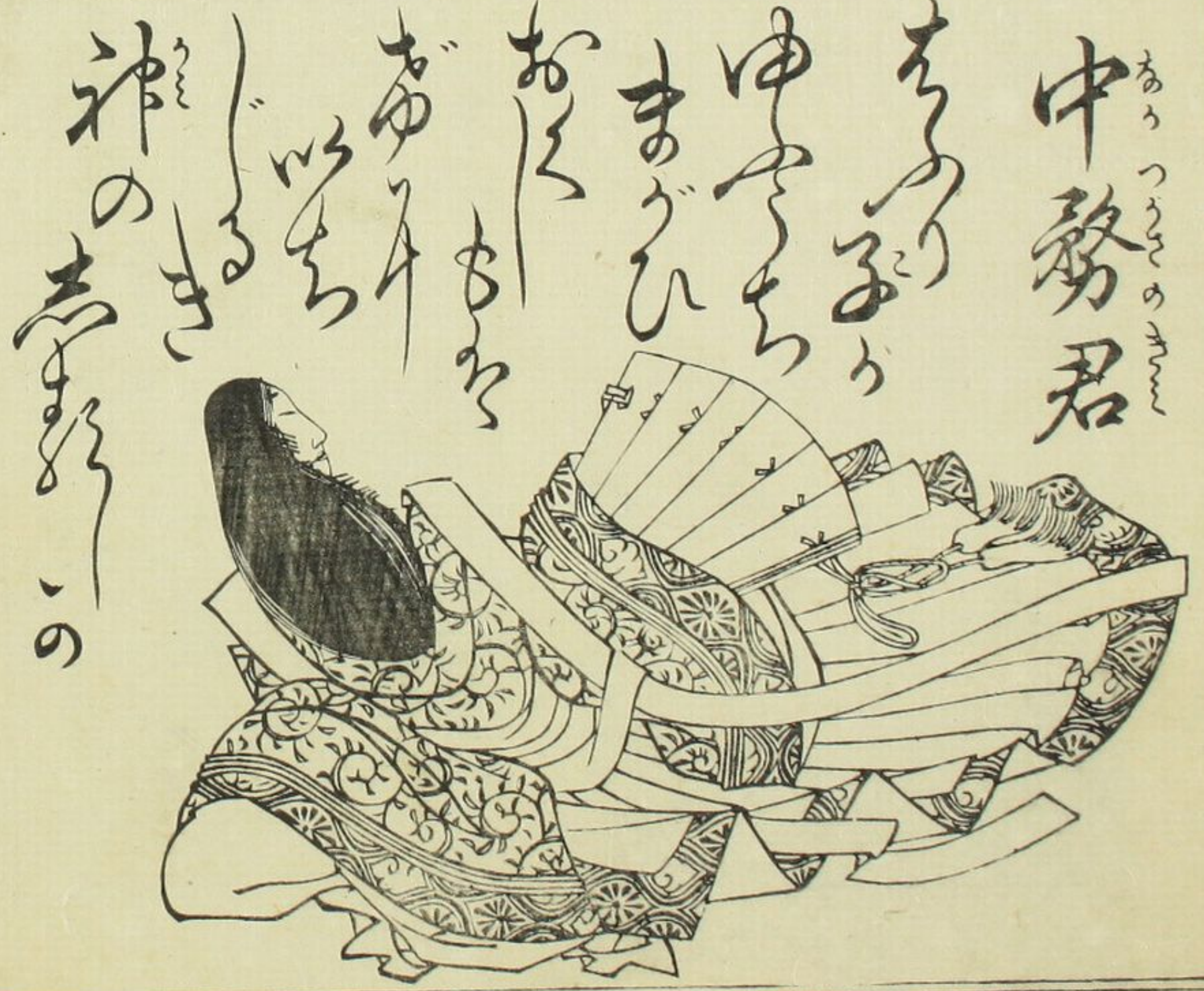


むげんらの北はつこの女
たもがけはつこの女
くわの女はつこの女
たれはつこの女
はつこの女
さうらび
いさゝか桂柱を父室の
許子候し給ふ物のけま
人の心へ入る人こそは
字のいふ御座りては
時流は桂柱の上〇今に
てやどるれぬとも別れ
はるるを承けへるは
ころたを桂柱に別れ
おのひ出さるるもさ
子三つとて入る物
ひはるる

宿守中将君
いさゝか桂柱を父室の
許子候し給ふ物のけま
人の心へ入る人こそは
字のいふ御座りては
時流は桂柱の上〇今に
てやどるれぬとも別れ
はるるを承けへるは
ころたを桂柱に別れ
おのひ出さるるもさ
子三つとて入る物
ひはるる



上は女房の御供は源氏思ふ
 今も侍一々任吉子坊多し
 子はあ上〇まみの江の松子お供
 つかへる御は神は登るゆわの
 づかもゆ石中宮〇神人乃
 みゆりもたる神系にゆゆ
 そある深きおのまお供
 するもくけし御もく
 子のお向る本縁子まのり
 おのつらおのたまはる
 厚神の納文はききき
 一々祝子の神友なり
 きていひはききなり



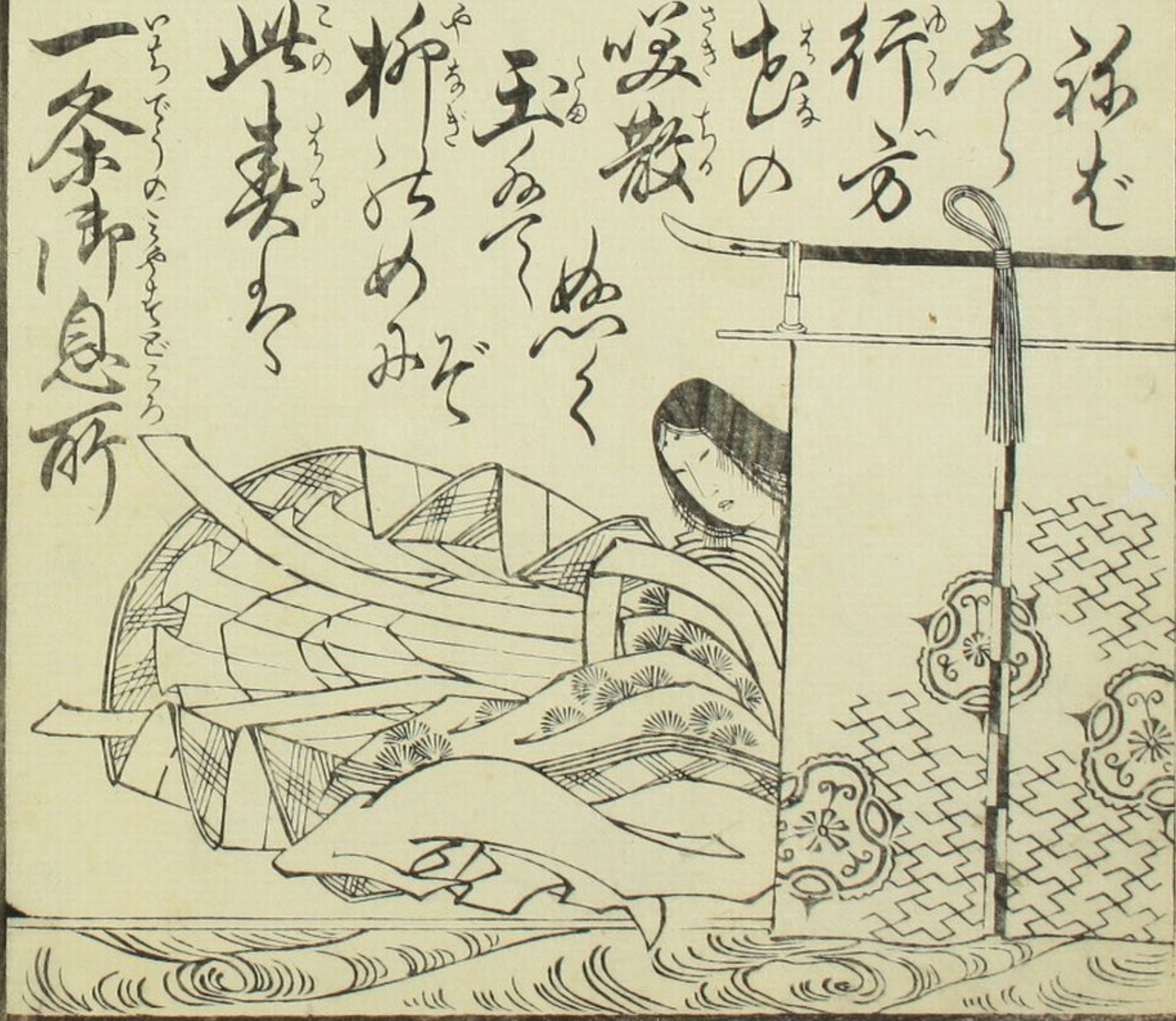
中務君
 申す
 まぐひ
 おは
 あり
 神の
 志

朱雀院の白玉女よ二宮也
 母は女房の御供は源氏思ふ
 院の御供は源氏思ふ
 北方へ来た二宮は木本を
 小茶大物を生く後尼もあつて
 三茶宮に住るは源氏思ふ
 くる時子源氏〇源氏思ふ
 一々祝子の神友なり
 きていひはききなり



三茶女三宮
 庭の宿を
 ちまひ
 君の
 侍
 羅
 む

朱雀院の更なる御茶室
 此の御茶室は御茶室の
 の北の方より南の方へ
 本々たる夕霧と云ふ
 一。時。は。か。ら。ぬ。を。ま
 白ひたり行枝樹の宿り
 橋もとくまひけられぬ
 今季の妻の御茶室の行方
 女を死せしむる御茶室
 後の玉目玉の御茶室の柳の芽
 小宮の玉目玉の御茶室の柳の芽
 御茶室の死を花の散るに
 せしむる



朱雀院の更なる御茶室
 此の御茶室は御茶室の
 の北の方より南の方へ
 本々たる夕霧と云ふ
 一。時。は。か。ら。ぬ。を。ま
 白ひたり行枝樹の宿り
 橋もとくまひけられぬ
 今季の妻の御茶室の行方
 女を死せしむる御茶室
 後の玉目玉の御茶室の柳の芽
 小宮の玉目玉の御茶室の柳の芽
 御茶室の死を花の散るに
 せしむる



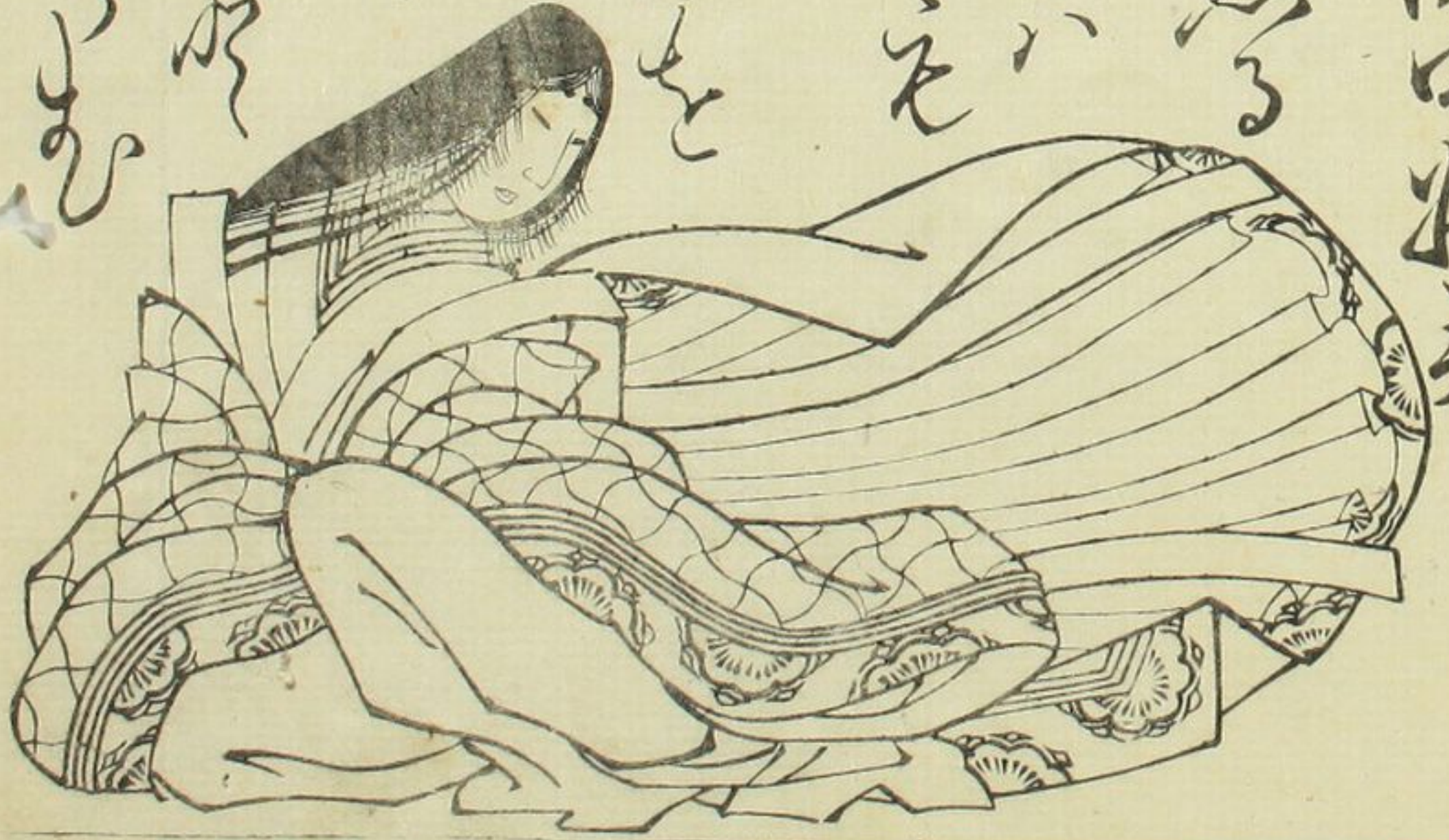
あふ上の善きくもの影を家
上太病の時子さしまへ
物の氣を以善にせむ
わらふもふはたむ
さねのうとくかゝるや
は幸何物ぞ告せむ
源氏の向ふつる答こる
こゝれ我をく今を生を替
て本の姿ぬれぬ君も
はかぬのまは君も
がく史知を教へる
死産はわが海をる影

物の氣童
我がくは
何れもさ
ぬれ
おま
あは
そくおぼ
はか
まみぬ



はあ上乃女居ぬくもの影ハ
はあ上かゝるはく一周忌
のまへにまづつるはあ
かまらりて源氏子居居
きりぬくくもぬれぬ
へを悪く候はく
水もぬきりぬれぬ
忌むる今日をまへ
ハ何れもさぬれぬ
まへにまづつるはあ

六条院中将
まみぬ
あは
ぬれ
あは
何れも
さぬれ
まみぬ



はまのうへにせりける年のあまのうへに
糸のうへにけりける年のあまのうへに
糸のうへにけりける年のあまのうへに
糸のうへにけりける年のあまのうへに
糸のうへにけりける年のあまのうへに
糸のうへにけりける年のあまのうへに
糸のうへにけりける年のあまのうへに
糸のうへにけりける年のあまのうへに
糸のうへにけりける年のあまのうへに
糸のうへにけりける年のあまのうへに



佛名導師

子代の喜

いとま

あま

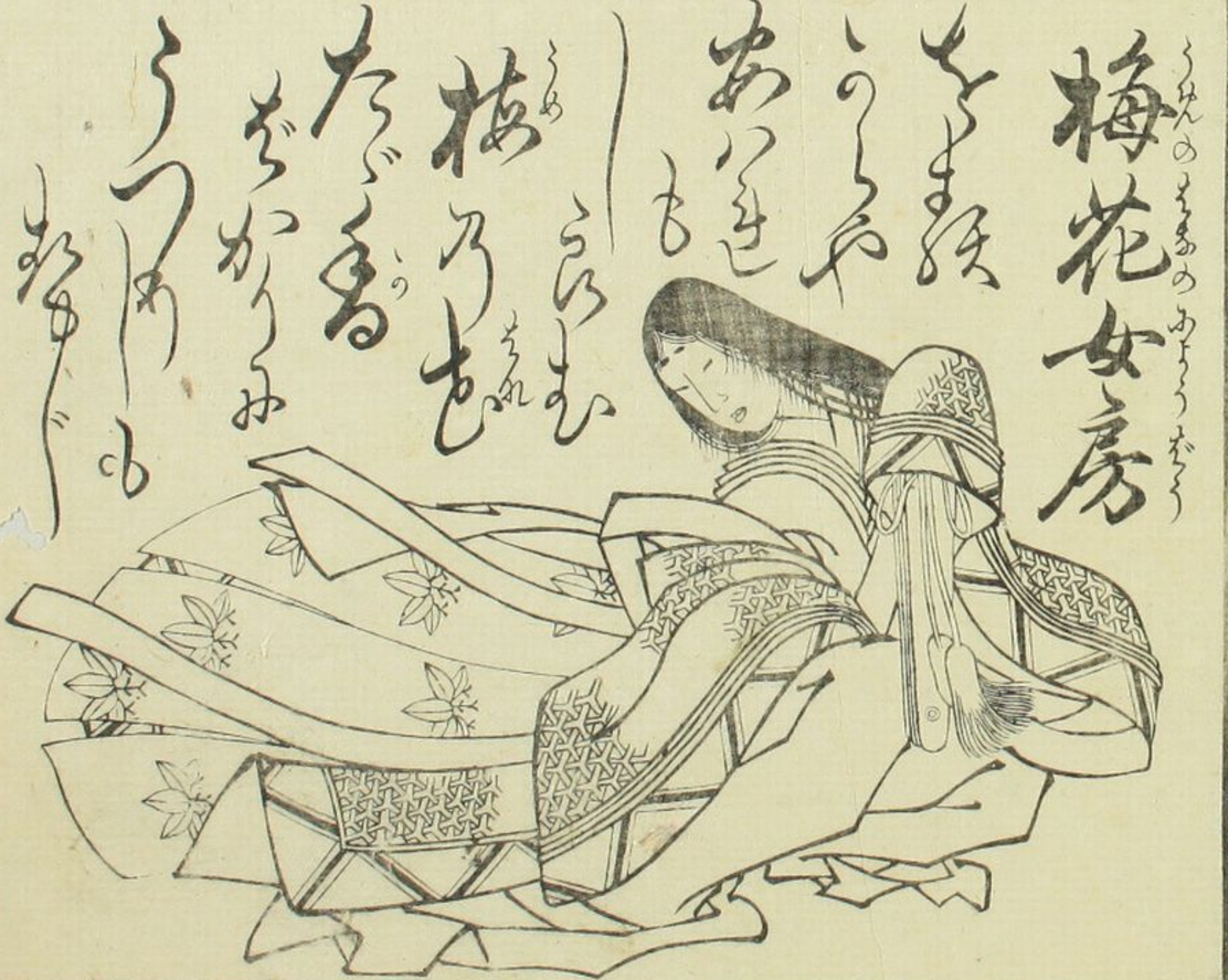
新置

我が

あま

あま

玉簪は女房ありける年のあまのうへに
玉簪は女房ありける年のあまのうへに
玉簪は女房ありける年のあまのうへに
玉簪は女房ありける年のあまのうへに
玉簪は女房ありける年のあまのうへに
玉簪は女房ありける年のあまのうへに
玉簪は女房ありける年のあまのうへに
玉簪は女房ありける年のあまのうへに
玉簪は女房ありける年のあまのうへに
玉簪は女房ありける年のあまのうへに



梅花女房

あま

あま

あま

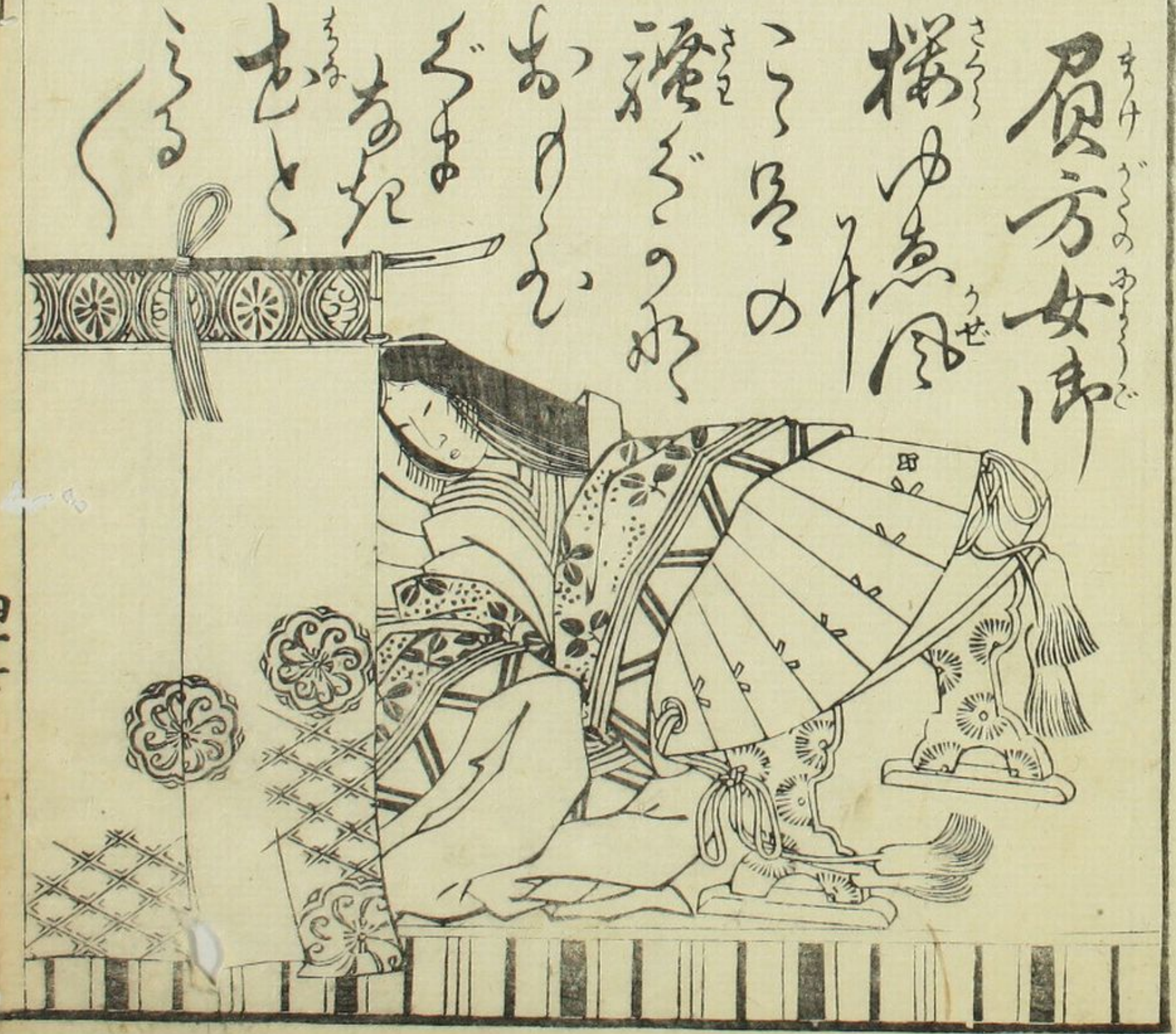
あま

あま

あま

父は賢母に玉當り竹川巻
 子に中ねはあはれはやくはひ
 葉の末は時子僅る樂の竹
 川にまで遊びを急ぎ
 て葉の深しきりうらさそ
 葉の許も○竹川はさか
 出り第一子ほきん底底
 あまやと母をさそるな
 く心に丹川さむい遊びを
 文よりわざいおぎはるひ
 一橋もいさるけりけ
 思ふおもしろもあまやさるけ
 子にあらはれしと○竹川の橋は
 つはあさやと園子我はは
 おろおろさそるけりけ
 する事よよるは賜答

父は賢母に玉當り竹川巻
 子に中ねはあはれはやくはひ
 葉の末は時子僅る樂の竹
 川にまで遊びを急ぎ
 て葉の深しきりうらさそ
 葉の許も○竹川はさか
 出り第一子ほきん底底
 あまやと母をさそるな
 く心に丹川さむい遊びを
 文よりわざいおぎはるひ
 一橋もいさるけりけ
 思ふおもしろもあまやさるけ
 子にあらはれしと○竹川の橋は
 つはあさやと園子我はは
 おろおろさそるけりけ
 する事よよるは賜答



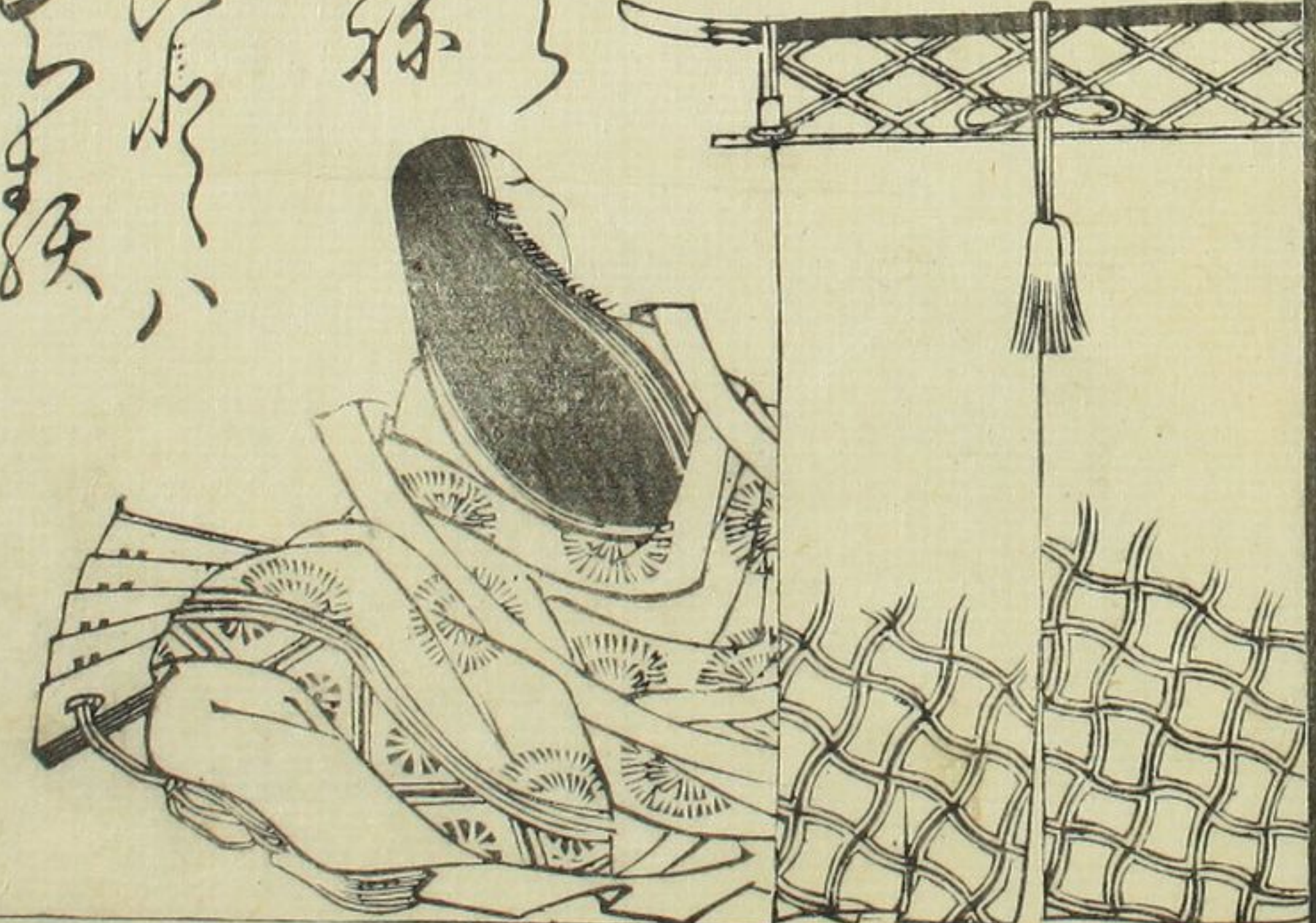
瑞草は女房をよき御
基の傍にありて左に付て
解るる方人きくを
くろい橋より物いさく
まをかくより教ゆる物
れを傍よりくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく

宰相君
さくさく
のり
散る
も
肩
あ
恨み
勢



肩方の女御は母玉草
の申づるをよみて内侍督
兼人とは
其
解
の
も
秘
下
も
お

見
た
お
ろ
枝
世
風
方
内
侍
督



同所は女はよきは國ト
 時の續くは方人の歌のハ
 橋もんもくは夜にぎ方の
 橋あるまらう別地の右
 此くたはるもよたそ水
 乃津や津もやう我方
 子流るるべしと花子物を
 いふつらやうまひて願
 方子ねがしむるは行み
 ねとくねう

大捕君
 人河
 以有
 落る
 阿
 我
 方
 子
 大
 空
 乃



おねく右方子つきの方
 女弄あつる子ちり
 ちるを拾かきよめ
 るはくくくくくくく
 ちめちれも甘散くも
 則我方は物ちれか
 如くかき集てくも
 見るはくくく

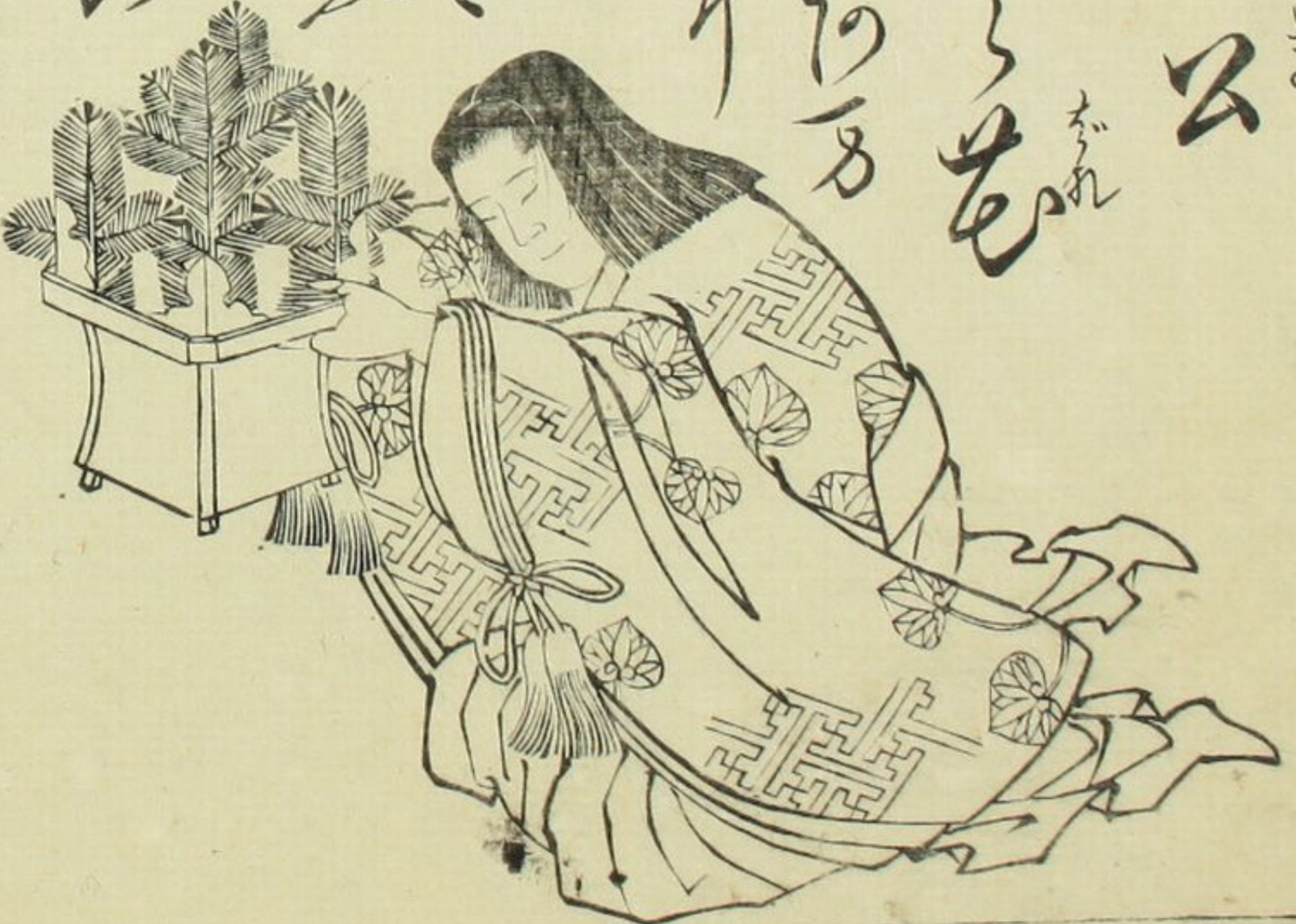
大空乃
 風
 物
 見
 見
 見



女童はあはれに左まつ髪を
負つての方へまゝに髪を
ゆるさぶく我物新子のこめ
つとも花の風は自由の吹き
は物もさへ甘白いよも人
のつゝに散さすと思ふ
古大空をわたる程のわろ
袖の世まはる物うらひせむ
とまかすゝゝゝのたのたの
は風を散ぶもとめかをま
○古空をわたる程のわろ袖
まぶらゝのふれもゝゝゝ
わろ

源氏一巻

馴公
さうらう花
白いり方
とら
おほま
その
袖の
わろ

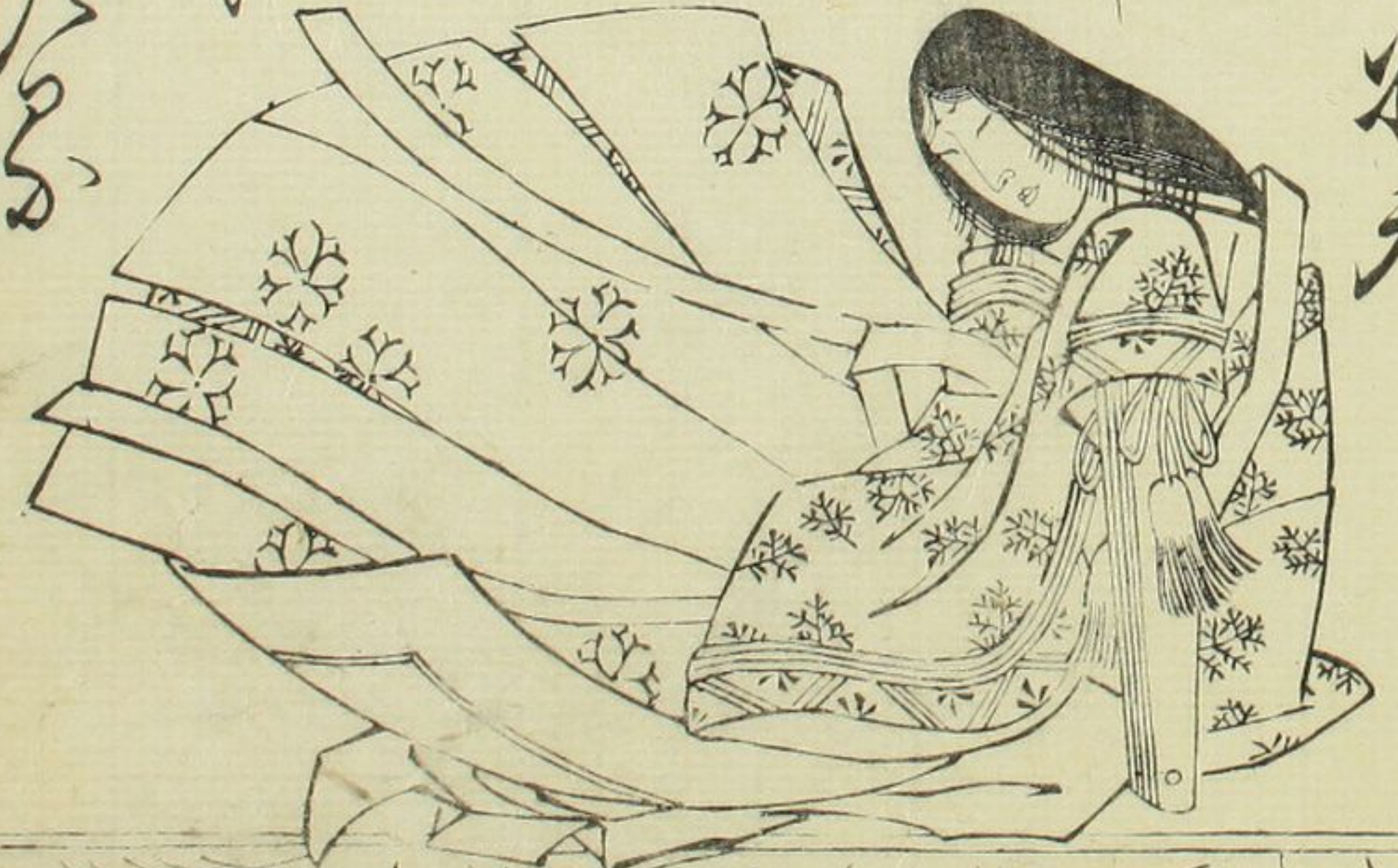


四十九

回所は女房ははれに髪を
お上の件ある誓のつゝを
をかしまゝに我の髪を
お負つてを悔し思ひて傍
に立て助言をせしむる
物をさす○はれやわろ散
ちぬるをわろわろのま
はれぬるをわろわろのま
ぬるをわろわろのま
ぬるをわろわろのま
ぬるをわろわろのま
ぬるをわろわろのま
ぬるをわろわろのま

督殿中将君

わろ
おほま
その
袖の
わろ



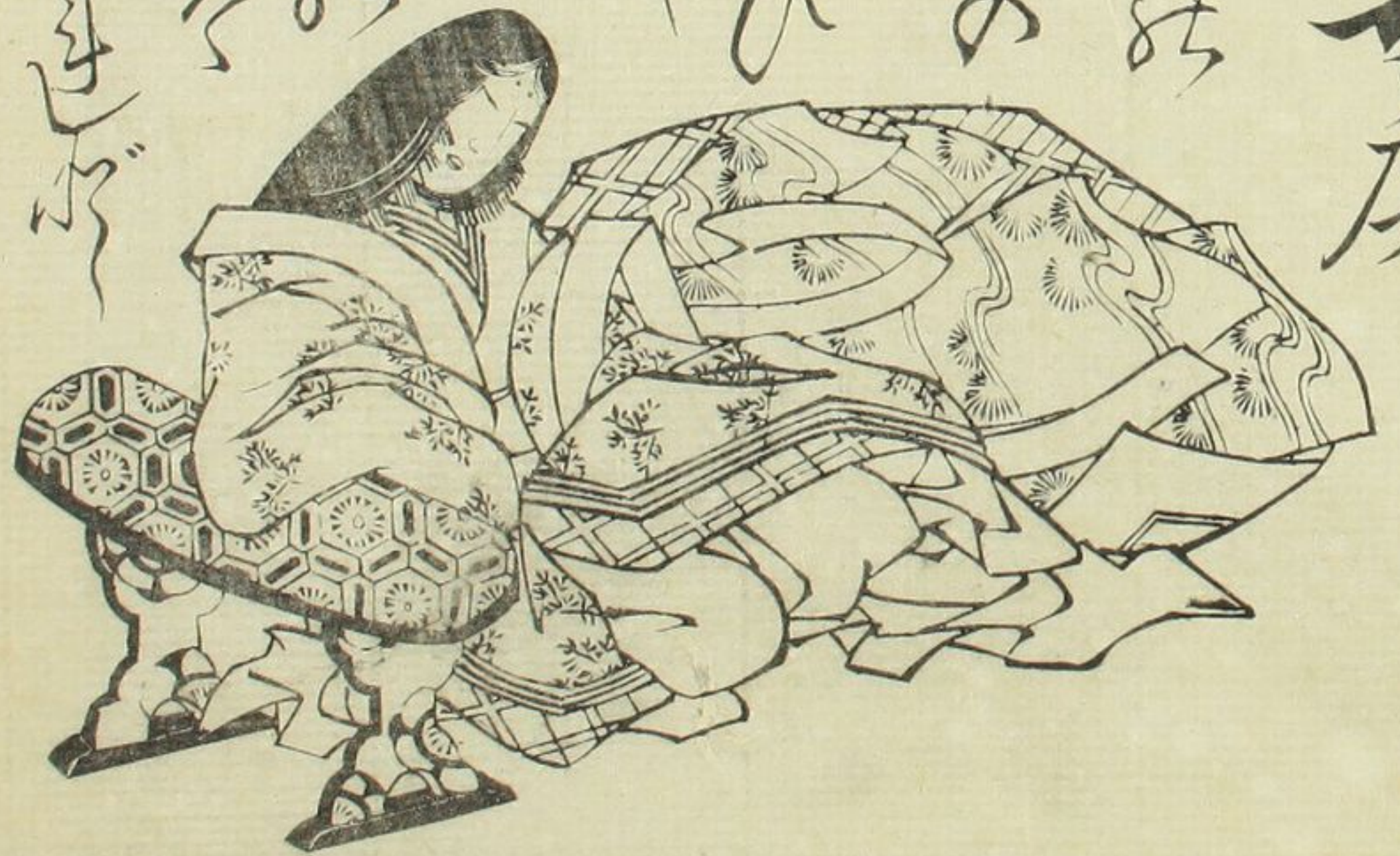
御子の後子も母の御孫に成りて
女御の御孫も母の御孫に成りて
御孫も御孫に成りて四位侍
従ふ御孫に成りて侍
本の書子権方御孫に成りて侍
と成りて侍御孫に成りて侍
い行路に成りて侍御孫に成りて侍
を侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍
御孫に成りて侍御孫に成りて侍
の御孫に成りて侍御孫に成りて侍
まを侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍
あはれも侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍
と成りて侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍
も侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍

蕉大将
山お落子
堪ぬこそ
紫の
阿やぬく
我をわづれ



玉葛の女房後其基に成りて
御孫に成りて侍御孫に成りて侍
くは御孫に成りて侍御孫に成りて侍
川に成りて侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍
出る侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍
ごちと玉葛の方を成りて侍御孫に成りて侍
侍と竹川に成りて侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍
おはる侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍
や勿論おはる侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍
あつちと成りて侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍
どもおはる侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍
は心を成りて侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍
女御と成りて侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍
今も又竹川に成りて侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍
くおはる侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍御孫に成りて侍

竹川女房
赤川
おはる
おはる
おはる
おはる
おはる
おはる



相違帝は白子原氏の御孫
 母と通す字はの望に任る
 又字治字も云はれぬ
 御はさふいらちあは
 ませばいづかおまむ
 優倭宮へ形倍あがり
 人にとりのくは
 まはけし後
 頼
 子をよせ
 の一種
 中
 打
 又小
 今

優倭宮
 まるか
 お
 は
 あり
 か
 大の世
 たち
 かり



優倭宮は白子原氏の御孫
 右大臣の姫と後南宮の
 御はさふいらちあは
 ませばいづかおまむ
 優倭宮へ形倍あがり
 人にとりのくは
 まはけし後
 頼
 子をよせ
 の一種
 中
 打
 又小
 今

後南宮
 袖
 我
 お
 かし



新帝は皇子を母の明
 石中宮の白宮をえ彼
 一々兵部は子孫の
 宇治のむねまを
 久の時優待を
 山風子か
 遠く痛て
 おと
 く心川の
 て汗の波
 風子
 まの

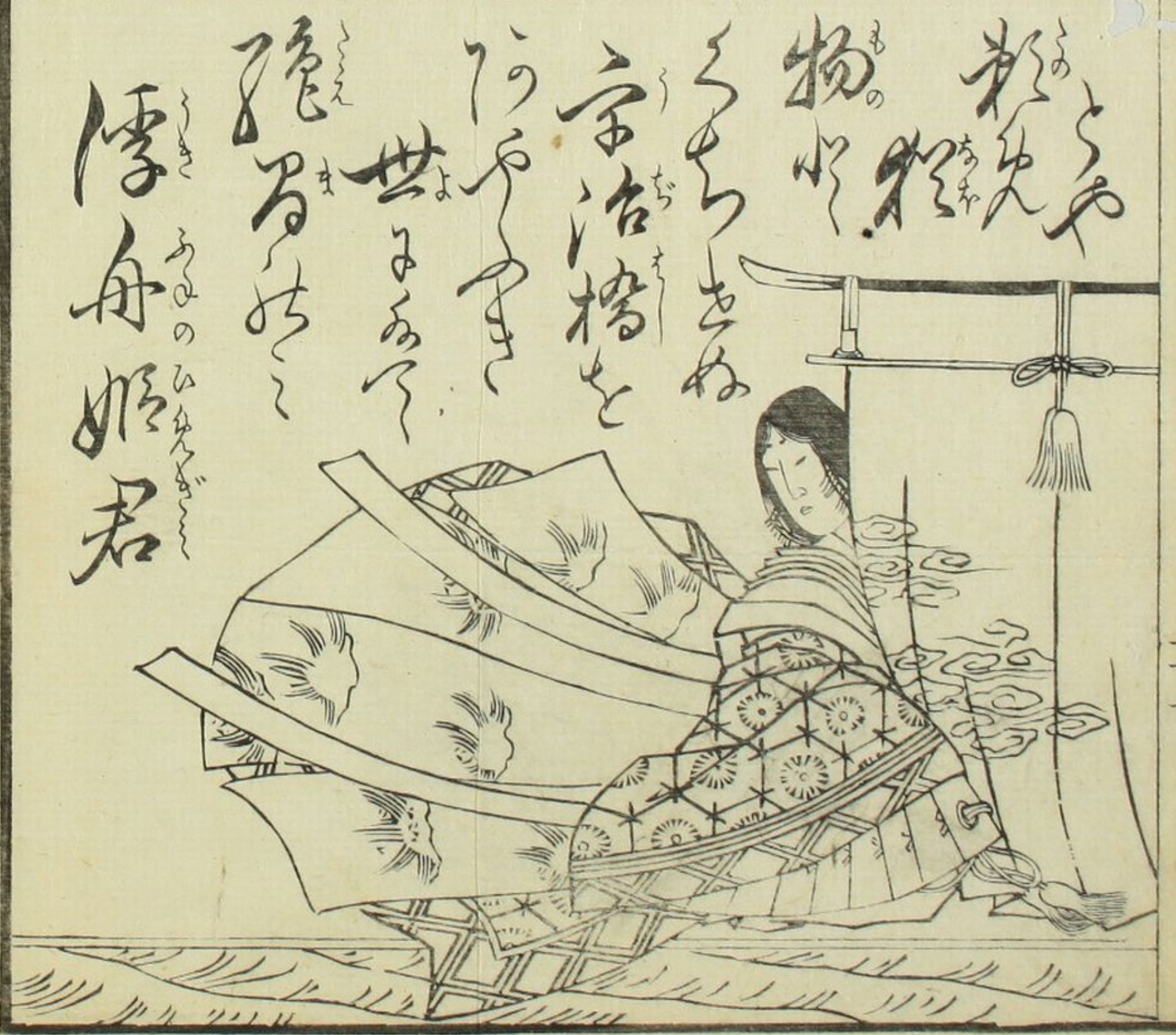


宇治中姫君



優待塞宮の
 夫は同胞の
 白宮に
 同宮は二
 皇子生
 法里に
 雲井を
 さを
 お
 時
 う
 若

優待塞言は... 娘を母ハ
 中ね夫と... 女産く四一
 巻子薫は... 人々集て
 言治子... 浮舟巻子
 白言と密通... 娘は巻
 に分をわけ... 横川傍
 ねの娘は... 密通して
 巻子尼と... 巻子の
 伴より... 橋の... 契
 朽きト... 方... 心
 わ... 休... せ... 返
 穴通... 浮舟巻子
 巻子... 娘... 契
 又... 娘... 契
 と... 娘... 契



娘... 物... 言治橋を
 阿... 世... 浮舟娘君

又... 母... 井... 原... 此
 紅... 娘... 契
 子... 娘... 契
 の... 娘... 契
 か... 娘... 契
 そ... 娘... 契
 以... 娘... 契
 本... 娘... 契
 さ... 娘... 契
 て... 娘... 契



宰相中将
 以つ娘... 契
 娘... 契
 娘... 契
 娘... 契

父の夕霧母八藤内侍をり
 この形もよきおかしき
 富には人に行きまじり
 宮法清俊より系りてある
 ありては山里法親王
 法親王の面もよき
 を行ひては山里法親王
 を見捨てては山里法親王
 ありては山里法親王

右衛門督
 山里の
 秋を行
 山里の
 山里の
 山里の



石中宮大夫は人を老
 人より昔の優俊塞宮を
 見れば知る人こそ是れ
 時子中宮の御子より
 ありては山里法親王
 を愛に任りては山里法親王
 優俊塞宮も今にありては
 石中宮の御子より
 ありては山里法親王
 ありては山里法親王

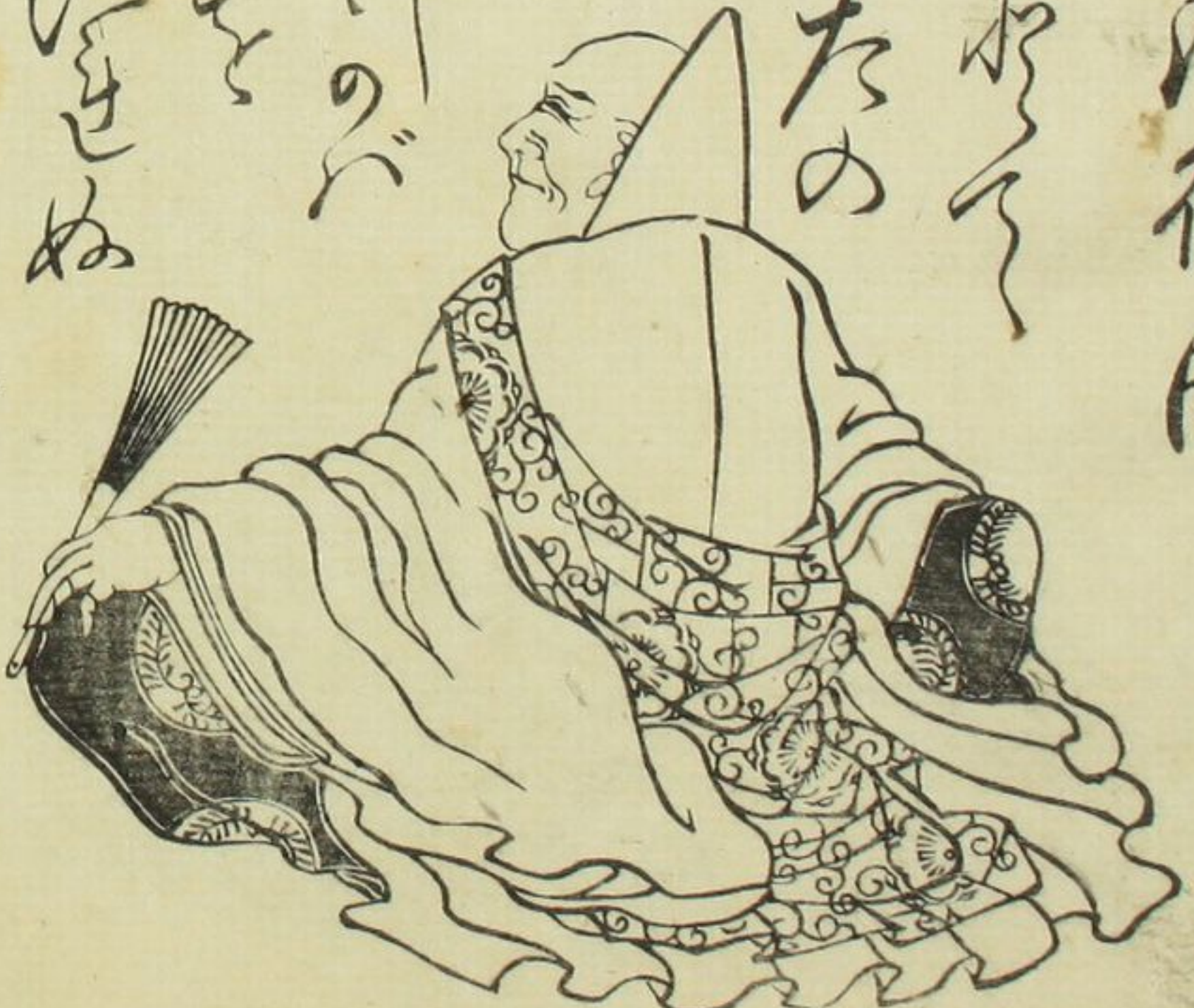
宮大夫
 山里の
 山里の
 山里の
 山里の



優徳の室宮の位法師なり
 権姫を子阿闍梨持持巻
 子律師くあつてはあつてを
 くは室かかしてはあつてを
 娘は姫買たりてはあつてを
 蕨つてくはあつてを
 さるるあつてはあつてを
 教字を奉へてはあつてを
 いつのあつてはあつてを
 うつに存る蕨はあつてを
 を様子蕨と扱をあつてを

宗治律師

君はおろ
 阿もたの
 善を
 法を
 つて
 己はさぬ
 はりて
 那



又六左中辨母の相本右衛門
 督の乳母之字治言子仕へ
 従角姫君かられりてはあつてを
 蕨を子尼子奉へてはあつてを
 姫君のせをてはあつてを
 解るるはあつてを
 まづ後のくはあつてを
 をかりあつてを
 をあつてを
 かれ死るるはあつてを

辨尼

さぬ
 ぬ
 阿も
 命



始末の言に依りて二条院に
 侍る女房は中娘に
 白言にゆくられて二条院に
 移りて時子に詠る心は世に
 長く立経るるにバのる
 始末の時もいひたる物を直
 々とし時子に言さるる物を
 物子思ひをいひて川子投
 ねども志すは此悦びのま
 まとて心を用意物ゆ
 ひ捨つる心をもいひての
 愛も言治はいひてしつ
 一きに終るる川子のま

二条院大輔
 侍る女房
 始末の言
 白言にゆ
 移りて時
 長く立経
 始末の時
 直々とし
 物子思ひ
 ねども志
 まとて心
 ひ捨つる
 愛も言治
 一きに終



同所の女房も同時
 終るる言に依りて
 終角娘の意もい
 ねども志すは此悦
 びのま
 まとて心
 ひ捨つる
 愛も言治
 一きに終

行心女房
 終るる言
 終角娘の
 ねども志
 びのま
 まとて心
 ひ捨つる
 愛も言治
 一きに終



朱世院の皇子は母、兼秀殿
女高橋宮大后の妹、標柱を
に奉るに立極の巻、元後
茶巻に逢位、つるを、はれ
此帝は女二宮は母、兼
女高橋宮大后の妹、母二宮の
御くかり、まはを、兼の
はれ、思ふ、日、兼、はれ、
はれ、母、女、はれ、
女二宮、兼、はれ、
兼、はれ、
はれ、
はれ、

新帝
兼小阿
はれ
おはれ
菊あはれ
はれ
あはれ
はれ

二條宮の女、兼、兼の思
ひ、はれ、兼の思、
兼、はれ、
兼、はれ、
兼、はれ、
兼、はれ、
兼、はれ、
兼、はれ、
兼、はれ、

兼察君
兼察君
兼察君
兼察君
兼察君
兼察君
兼察君
兼察君

親帝は女三宮に心を盡し
人こそ思ふを葉子下し
へくさるらば心白女三宮を
葉の方へ戻さるべき前も
葉子下し葉の方へ戻りし時
は既に縁多し世の若き時
思ふも思ふれど帝は
かづも娘の聲に慥に
叶上さる葉子下し乃果
報者なりと云ふを言はれ
おもひはしむるも葉子下し
て思ふも思ふれど帝は



世は若の
以るも思ふれど
大ら花あり
葉子下し
葉の方へ
戻さるべき
前も

始中若君とて優俊寒を
子は傳舟船夫を産後
若陸めは葉子下し人
若陸めは葉子下し人
思ひつるも葉子下し
若陸めは葉子下し人
りし時少若子下し
へくさるらば心白女
三宮を葉の方へ戻
さるべき前も葉子
下し葉の方へ戻り
し時既に縁多し世
の若き時思ふも思
ふれど帝はかづも
娘の聲に慥に叶上
さる葉子下し乃果
報者なりと云ふを
言はれおもひはし
むるも葉子下し



世は若の
以るも思ふれど
大ら花あり
葉子下し
葉の方へ
戻さるべき
前も

上の歌の由一と優俊寒
字の成りしとてふをわ
柳も外心も梅も子ね
みまき物も唯もさ
めがすもささくも
に思ひもささくも
くもいんも字珠也のこ
宮珠也の陸奥其の久
宮珠也の陸奥其の久

少将
宮珠也
ささくも
りも
志も
者も
わの
何



石中宮の後多二品
の女房子も薫の思ひ人
は浮舟も君もあ
後薫は教也
らんも心也の哀を
人も心もあ
をんも推量も
はるも心もあ
人教も心もあ
心も心もあ
心も心もあ

小宰相君
心も
心も
心も
心も
心も
心も
心も
心も
心も
心も



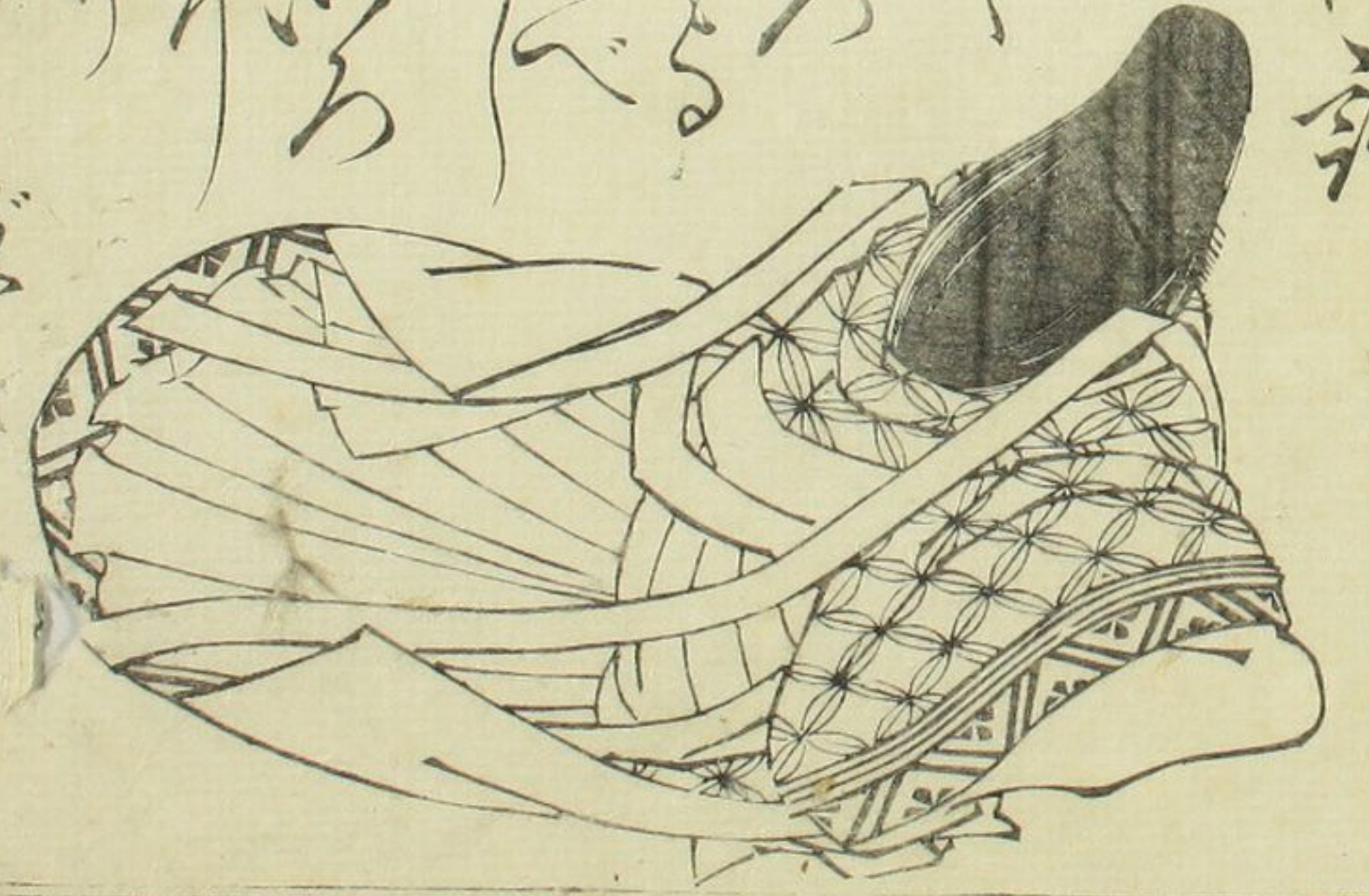
同定は女房とは別な女房
 とも物語しと存する所く
 薫はとらふまうたりとせし
 ○女房を亂る所は通い
 一に名はまゝとていれども
 一通りの男をんを乱すの
 へいゝ物まはけはのふん
 を女房を乱る所は通い
 びい

せんれん
 女房志
 花吹雪
 一品宮中将君



おおの言の女房をよと
 おはし時子もたるとる
 さやに口はくつとてい
 ねさかつはもよとてい
 移る物々々々々々々々
 中にありて自れを
 とくはも薫のけり答へ

辨法辨
 旅
 女房志
 花吹雪
 一品宮中将君



天保十年己亥十二月發行



松軒田靖書
婚齋清福画
玉山書堂梓

武藏國埼玉郡忍藩

黒澤翁滿先生著述書目

言靈抄上編

此書ハ朝の活きや、群の結ぶと假
字抄のひのこをむむと群むむお音
便通音延約發語助群の歌よや
九お歌交も付て用ひる事お熱て
りもむむあむむ解さむむむむむむ
子丁教僅は二十葉に色は後世
何の歌の相をむむむむは深き正
き古人格格をむむ却て。の法む
む事とむむむむむむむむむむ
接を引てむむ論破一今時乃
くは云る群の結むの法則を五直
一む僅は十三群を記憶むむむ余

万葉集大全

仙光が万葉抄を始其沖が代通
紀世後つ組は万葉考もむむむ
書もむむむ万葉抄の訳もむむむ
略解もむむむむむむむむむむ
はむむむ揚て且法國初音の學友
むむむむむむむむむむの考もむ
むむむむむむむむむむ大威のむ

古今集大全

顯注密勅を始とむ群材むむ
遠鏡もむむむ諸先達の説もむむ
漏るむむむ且自の考もむむむ

一切の辭を誤らざる早道をとせし
され又假字ハ殊ニ多端なる物也
るをまも僅ニ百子ハ一二を採ら
んとて其餘一切の假字を拒り
納る新法を新ニ考へ出さば并
詞の活きも心を勞さばりて水々
ニ志すべし如き也考へし初學
業師より考へて獨歩のりる
ニ果妙を極む所也

同 中編

一切の辭凡そ二百五十余語を
考へ出さば其辭も心を用ひ
し細く考へて其別を考へし初
學の考へし考へし初學の考へ
集はねばいかに其古來辭
と爲る所は辭も考へし

明くは辨らるる

同 下編

六十音の辨法考へし考へし
いふに考へし考へし本と考へ
皇國此言靈也一々悉量類鏡
此及ぶ所は考へし考へし一音
を以て万音は辨らるる非也
よし辨らるる。之ニ音は辨ら
考へし六十音の考へし相も自
他の差別は考へし考へし自
ハ三版四版の考へし考へし二方
活く詞新古活き考へし詞近
活活活活活も考へし考へし出
て辨らるる考へし考へし上は
以ふ考へし考へし考へし考へし
考へし考へし考へし考へし考へし
又辨法格考へし考へし考へし

らば僅ニ四卷の考へし考へし
考へし古今注釈大成の考へし

神樂催馬樂抄

世ハハ考へし考へし考へし
愛知縣居の考へし考へし考へし
考へし考へし考へし考へし考へし
考へし考へし考へし考へし考へし

北勢古志

伊勢國風土記の考へし考へし
考へし考へし考へし考へし考へし
考へし考へし考へし考へし考へし
考へし考へし考へし考へし考へし

示正論

格格の考へし考へし考へし考へし
考へし考へし考へし考へし考へし
考へし考へし考へし考へし考へし
考へし考へし考へし考へし考へし

消息案文

世ハ消息の考へし考へし考へし
考へし考へし考へし考へし考へし
考へし考へし考へし考へし考へし
考へし考へし考へし考へし考へし

巧拙を論じ且一法の活相おの例
子造るるを始りて種々法考し
き相おもを論じ法先て終りハ
法則を種々又法則に入る相
法を法を重なる事をも細くみ
論じつゝおのれなり

隨意稿

月々も法考法中よりおのれ法
盛頼於善惡の論天狗仙人の説
お女外漢出の今やゝ幽冥子舍
ゆる新法おのれ類一きハ耳
新くもももをのれ集めらるる

道行振

こそ古きおも子出るるおつ
きおしを何れおおくおるお
おしおおお直進する法考し
儒佛の輩法考するお多し

童話長篇

若活の舌知雀権太常のお話を
く古きお長篇お賦法考し
く女生所を考らるるお多し
一法を童話考するお多し



小笠原下

天保十二辛丑年正月

發行書林

- 芝神明前 岡田屋嘉七
- 日本橋通二丁目 小林新兵衛
- 本石町十軒店 大英助
- 中橋廣小路 西宮弥兵衛
- 通壹丁目 須原屋茂兵衛
- 浅草茅町 同 伊八
- 通四丁目 同 佐助
- 通貳丁目 山城屋佐兵衛

